

大分市

市内遺跡確認調査概報

－2004年度－

2005

大分市教育委員会

大分市

市内遺跡確認調査概報

— 2004年度 —

2005

大分市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成16年度に大分市教育委員会が実施した市内遺跡確認調査の概要報告である。
- 2 本書には横尾遺跡、城原・里遺跡、大友氏館跡、中世大友府内町跡の調査成果を収録した。
- 3 発掘調査の費用は、国と県から補助金を受けて、大分市が負担した。
- 4 調査及び整理に伴う事項については、各遺跡の報告文中に記した。
- 5 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。
- 6 出土遺物、記録資料は大分市顕徳町文化財資料室（大分市顕徳町3丁目2番43号）大分市横尾地区文化財資料室（大分市大字横尾2354-1）に収蔵、保管している。
- 7 本書、大友氏館跡・中世大友府内町跡の調査概要の中で使用している各土師器の用語については、第3章（1）にまとめている。
- 8 大友氏館跡・中世大友府内町跡の調査概要の第1図「これまでの中世大友城下町跡調査地点と府内復原想定図（2005改正）」については、『大分市史中巻付図Ⅱ』をベースに、資料館ニュース63号（2003）、及びこれまでの調査成果をもとに部分改正を行なっている。
- 8 本書の執筆ならびに編集は各調査担当者が行い、その取りまとめを池邊が担当した。
- 9 調査体制については以下のとおりである。

大分市教育委員会 教育長 秦 政 博

文化財課

課 長	足 立 昌 人
参 事	玉 永 光 洋
課長補佐兼文化財係長	巖 岐 和 夫
管理係	管理係長 久多羅岐 明
	主 査 平 野 勝 敏
	指導主事 姫 野 公 徳
	主 任 桑 原 治
	主 任 安 部 一 成
	主 事 加 藤 キ ャ（7月～）
	主 事 三 浦 亜 紀（～6月末）
文化財係	指導主事 後 藤 典 幸 専 門 員
	主任技師 池 邊 千 太 郎 主任技師
	主任技師 河 野 史 郎 技 師
	主 事 佐 藤 道 文 主 事
	嘱 託 水 町 裕 子 嘱 託
	嘱 託 梅 田 昭 宏 嘱 託
	嘱 託 奥 村 義 貴 嘱 託
	嘱 託 梅 木 信 宏 嘱 託
	嘱 託 上 野 淳 也 嘱 託
	嘱 託 衛 藤 亮 介 嘱 託
	嘱 託 服 部 真 和 嘱 託
	嘱 託 菊 谷 史 穂 嘱 託
	嘱 託 堤 昭 司 嘱 託
	嘱 託 佐 藤 曉 子 嘱 託

大分市歴史資料館

参事兼館長	木 村 幾 多 郎
課長補佐兼副館長	首 藤 公 洋
主 査	広 岡 道 代
主 査	安 部 幹 夫
主 査	武 富 雅 宣
主 査	長 田 弘 通
指導主事	甲 斐 猛
指導主事	佐 藤 充 弘
研修教諭	高 橋 修 一
専 門 員	坪 根 伸 也
主任技師	高 島 豊
主 事	永 松 正 大
事 務 員	古 川 匠 聡
嘱 託	松 尾 達 郎
嘱 託	佐 藤 孝 則
嘱 託	羽 田 野 裕 之
嘱 託	小 住 武 史
嘱 託	山 本 哲 也
嘱 託	山 下 美 郷
嘱 託	（～6月末）
嘱 託	三 田 村 昌 男
嘱 託	古 瀬 美 鈴
嘱 託	勝 間 田 あ や

橫尾遺跡



2005



写真1 第93次調査区ST085埋葬人骨上半身



写真2 第93次調査区ST085埋葬人骨下半身

第1章 はじめに

(1) 調査に至る経緯

横尾遺跡の調査は大分市が平成3年度から開始した大分市横尾土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として行われてきた。平成12・13年度に横尾貝塚の西側隣接地において実施された横尾遺跡第82次調査によって、縄文時代後期前葉頃に比定されるドングリ貯蔵穴群をはじめ、アカホヤ火山灰層の下位から加工木を「コ」の字状に配置した「水場の遺構」やその内部からカゴに収納された状態で姫島産黒曜石が発見されたことを受け、平成13年9月より国庫補助事業による範囲確認調査が実施されることになった。平成14年度からは横尾貝塚周辺地の約20haを対象として2期6ヵ年の確認調査が計画された。また、同年度からは大分市横尾遺跡調査指導者が設置され、今後の調査計画を進めていくことになった。

確認調査の3年目となる平成16年度は、前年度に引き続き「水場の遺構」の位置づけを行うこと、そして横尾貝塚を含むこれらの遺構群を形成した母体である縄文時代の集落の状況を把握することを主目的とし、第82次調査区の西側丘陵斜面と台地上を中心とする周辺地区の調査を実施した。その概要をここに報告する。

(2) 調査組織

大分市横尾遺跡調査指導者会

- 会 長 渡辺 誠 (名古屋大学名誉教授)
副会長 岡村 道雄 (奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部長)
委 員 浅川 滋男 (鳥取環境大学環境デザイン学科教授)
金原 正明 (奈良教育大学総合教育課程文化財コース古文化財学科助教授)
中村 俊夫 (名古屋大学年代測定総合研究センター教授)
那須 孝伸 (大阪市立自然史博物館館長)
町田 洋 (東京都立大学名誉教授)
松井 章 (奈良文化財研究所主任研究官)
山田 昌久 (東京都立大学人文学部史学科助教授)

調査指導 渋谷 忠章 (大分県教育庁文化課参事兼課長補佐)

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政 博

調査担当 塩地 潤一 古川 匠 山本 哲也 岩尾美保子 衛藤 亮介 大野 瑞恵

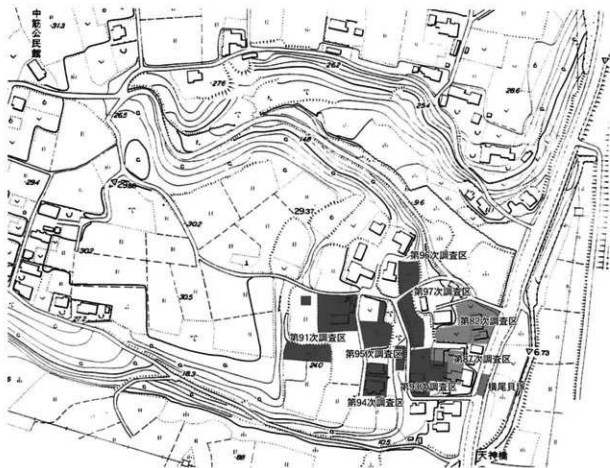
発掘作業従事者

麻生 重信 飯田 美子 伊村千恵子 梅田美代子 江崎 義豊 江藤アヤ子 太田 重行 大塚 弘子
片野アケミ 岸田ヤス子 清武 元子 古賀 蘭子 佐藤美紀子 佐藤 美子 園田 哲子 竹中 久美
田原ヒナ子 姫野トシ子 姫野ムツ子 水井 明美 向井麻規子 村谷 初代 山村シズ子

整理作業従事者

川筋智栄子 串 京 子 佐藤 志信 佐藤 良子 柴田 美紀 内藤 友子 西村 伸也 平田美智子
本田かおり 吉田 睦子

- ・93ST085出土人骨の取り上げについては、九州大学大学院比較社会研究環境変動部門教授 田中良之氏のご協力を得た。また、93ST120出土人骨についてもご教示を受けた。
- ・本文の執筆は塩地の助力の下、第2章(1)を衛藤が、それ以外を古川が担当した。編集は古川が行なった。



第1図 調査区位置図

第2章 平成16年度の調査概要

(1) 横尾遺跡第91次調査

調査地は大分市大字横尾字江又に位置し、大野川の分流、乙津川左岸に沿って南北方向へ広がる鶴崎台地東端段丘部の標高約20～23m地点にあたる。調査区北側には乙津川へ向けて東側に開口する谷部が存在し、既往の調査成果より、この谷部に結節し、北側へ開口する小さな埋没谷の存在が想定され、その一帯に横尾貝塚、ならびに縄文時代後期前葉頃に比定されるドングリ貯蔵穴群をはじめ、同早期末頃に比定される「水場の遺構」ならびにカゴに収納された姫島産黒曜石などが発見された第82次調査地点が位置する。また、調査区南側には9世紀前半代の竪穴遺構や掘立柱建物跡が発見された第43次調査地点が存在する。

この北側に開口する谷を埋める中世段階の大規模造成に伴って、縄文時代の遺物が大量に廃棄されており、その遺存状態ならびに廃棄の方向から当該地一帯が縄文時代後期前葉頃における居住空間として機能していた最有力候補地と想定されるため、調査対象地に6本のトレンチを設定し、確認調査を実施した。調査の結果、各トレンチにおいて古代～近世にかけての遺構群が検出された。以下に各時代の様相についてまとめる。

古代

調査区南西部の第5トレンチにおいて、柵跡(SA090)ならびに数多くの土坑群が検出されている。検出段階の出土遺物からは詳細な年代は断定できていないものの、南側に所在する第43次調査地において9世紀前半代の竪穴遺構や掘立柱建物跡が検出されていることから近接する時期のものである可能性が想定される。

さらに、先述の谷を埋める中世段階の造成土層からは官衙遺跡通有の風字硯や越州窯系青磁碗、緑釉陶器、刻

書土師器蓋等の優位性が認められる遺物が出土しており、本調査区の西側台地上に位置する第88次調査区においては、火葬墓の可能性が想定される9世紀代の方形周溝遺構が確認されている。狭川(1998)によれば、古代の火葬墓については、郡司候補者として認められた有力氏族の墓である可能性が指摘されており、当該地周辺部の調査によって出土している遺物様相については氏の見解を踏づけるものと判断される。今回の調査ではその存在を示唆する成果は得られなかったものの、本調査区内に当該期の遺構の展開が確認されたことは看過できず、埋没谷の造成土層から出土した優位性が認められる遺物群との関連性が想定される。

中世

当該期の遺構としては調査区北西部の第3トレンチにおいて、埋納遺構、掘立建物跡などが確認されている。掘立建物跡については91SB060・065・075が相当する。SB060は1間×3間以上の南北棟であり、出土遺物としては小野分類のB1群に相当する染付皿片が確認されており、15世紀末～16世紀中頃に比定される。SB065は1間×2間以上の南北棟であり、調査区外にまで展開する。主軸は南北方向を示し、SB060に並行する形で検出されている。出土遺物は僅少であり、時期は断定できないものの、SB060と同時期のものと想定される。SB075は平面方形プランを呈す2間×2間の建物跡である。SB060・065の主軸方向とほぼ一致することから、これらと併存していた可能性が示唆される。

埋納遺構については91SX085が相当し、第3トレンチ南側に確認されている。平面プランについては隅丸方形を呈す土坑であり、完存の京都系土師器皿と津州窯系染付皿片が出土している。埋土は2層に分層され、上層は黒褐色土、下層は暗茶色ブロック土である。京都系土師器皿と津州窯系染付皿は共に黒褐色土層に内包され、他に土坑内からの出土遺物については皆無である。また、津州窯系染付皿片については、隣接する遺構から出土した同染付皿片と接合関係が認められ、本来完存の皿が埋納されていたと判断される。時期については両者の帰属年代より16世紀末頃に比定されるものである。

横尾遺跡における16世紀代の遺構群については、台地上において方形館跡が確認されており、今回確認された遺構群との関連が注目される。

近世

当該期の遺構としては調査区北西部の第3トレンチにおいて、掘立建物跡、櫓跡が確認されている。

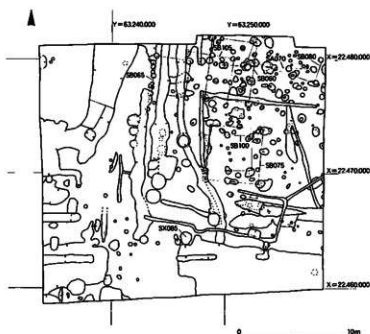
櫓跡については91SA070が相当し、東西方向に展開する。唐津系陶器碗が出土しており、17世紀初頭～中頃に比定される。

また、掘立建物跡については91SB100が相当し、2間×1間の東西棟である。出土遺物は細片のため時期比定は困難であるものの、SA070と同じ主軸方向を呈すことから、同時期のものと考えられる。この他にも時期不明ながら第3トレンチにおいて掘立建物跡(91SB080・105)が確認されている。SB080は現状で3間×1間のコの字状を呈す柱穴列であるが、その大半が調査区外に展開している事が予測される。SB060およびSA070との位置関係から同時性は認められない。SB105は2間×2間以上で、調査区外に展開し、建物跡になる可能性が想定される。主軸方向はSB060・065・075と同じであるものの、SB060との位置関係から同時性は認められない。

以上のことから当調査区における建物跡ならびに櫓跡については15世紀末～16世紀中頃にSB060・065・075が構築される段階から、17世紀初頭～中頃にSA070・SB100、それに前後するSB080・105が構築される段階の少なくとも三段階の遺構変遷が想定される。

今回の調査では、すべてのトレンチにおいて遺構を確認することができた。その大半は15世紀末～17世紀中頃に比定される遺構群であるものの、当該地一帯に古代～近世にかけて遺構が形成された可能性を示唆する成果と判断されるものである。また、今回当該地に遺構が検出されたことを踏まえれば、古地形復原を行うに当たり、現況地形の検討が有効である蓋然性が高くなったと考えられる。

先述のとおり、当該地周辺は北側には乙津川へ向けて東側に開口する谷が存在し、この谷部に向けて北側へ開



第2図 第91次調査区第3トレンチ遺構配置図(1/300)

口、連結する可能性が認められる小さな埋没谷の存在が想定されており、当調査地はこの埋没谷の西側丘陵部に位置することになる。当該地の現況は水田耕作により概ね平坦に造成されているものの、今回の調査成果より、当該地は乙津川に向けて開口する谷とそれに直行する形で確認された埋没谷に向かって北東方向へ延びる緩斜面地であった可能性が示唆される。埋没谷には縄文時代の遺構はもとより、縄文時代に比定される土器や石器を大量に内包する中世の大規模造成土の存在が明らかとなっており、遺物の出土状況から縄文時代の遺物が本来内包されていた遺構群、つまり縄文時代の遺構群についても至近の場所に形成された可能性が指摘されている。以上のことから、今回の調査では縄文時代の顕著な遺構については検出されなかったものの、当該地一帯の緩斜面地については、依然として縄文時代後期前葉頃における居住空間として機能していた最有力候補地である蓋然性は高いと判断される。更なる調査の進展に期待したい。

(2) 横尾遺跡第93次調査

第93次調査区は、大分市大字横尾字江又に所在する。平成15年度に確認調査を行った第87次調査区が北に隣接し、さらに30mほど北に第82次調査区が存在する。第82次調査区では縄文時代早期後葉の姫島産黒曜石製超大型石核や、カゴ入り姫島産黒曜石と部材から構成される早期末の「水場の遺構」、後期前葉のドングリ貯蔵穴などが発見されている。第87次調査区では前期前葉の小規模貝塚、縄文式深鉢の埋納遺構、後期前葉頃の配石遺構、地床跡が検出されている。東側に立地する横尾貝塚と併せて、周囲には縄文時代の遺構が数多く存在する。

第82・87次の両調査区は中世段階に埋没した、北側に開口する小規模な谷の底に立地することが判明しており、第93次調査区はこの谷の南側の頭から谷底に至る地点に位置する。第82・87次調査区では中世の堆積層より後期前葉を中心とする非常に大量の縄文土器が出土しており、中世段階に二次的に移動した、と推定される。そして

出土位置の分布状況から、これらの縄文土器の本来の帰属地として第93次調査区を含む西側の斜面地が有力な候補となることが、昨年度の調査より明らかになった。そして隣接する第87次調査区で当該期の定住生活に伴う遺構群が検出されたことから、縄文時代後期の集落がこの地点に存在した蓋然性は高いであろう。今回の調査の主目的はこの集落に伴う遺構の有無の確認であり、総面積約620㎡の調査区を設定した。ただし中世段階の遺構面は全面を調査したが、より下層の遺構群は第87次調査区に隣接する調査区の北半を調査しており、南部分は次年度以降の調査を予定している。コナナ総数約50箱分の遺物が出土しており、そのうち縄文土器が大半を占める。以下に今回確認された各時代の遺構群について概略を報告する。

縄文時代前期前葉(第3図)

今年度の確認調査は縄文時代後期前葉の文化面で終了しているが、さらに下位の堆積層を同一平面で検出している。この層(SX135)は隣接する第87次調査区で確認されている縄B式深鉢の埋納土坑(87SX013)を基盤層とする、縄文時代前期前葉の文化面を形成する層と同一とみなされ、後期前葉の文化面の下に全面的に展開するものと予想される。この堆積層からは第87次調査区で検出された小規模土坑(87SX026)の一部と考えられる獣骨層(SX130)と土坑敷基を確認している。

縄文時代後期前葉(第3図)

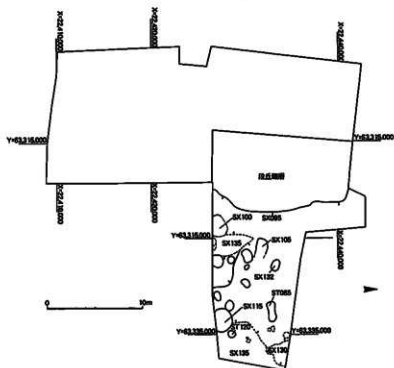
SX095を基盤層とする遺構面である。この層は第82・87次調査区で後期前葉に比定されている堆積層と同一である。包含する遺物として、縄B式深鉢(第6図1)、羽鳥下層Ⅲ式並行深鉢(宮本1993)(第6図2・3)が出土している。堆積の範囲は埋没谷の底に当たる平坦面にほぼ限定され、より標高の高い西側の斜面地にはほとんど堆積していない。この文化面では以下に挙げる遺構を検出した。

調査地東端と調査地中央付近で竪穴状遺構が1基ずつ存在する(SX100・SX115)。SX100は現代の掘乱を被り平面プランが不明瞭であるが、SX115はほぼ原形を保っている。どちらも調査区の壁に一部がかかり、土層の観察からこの文化面を基盤層とする遺構であることは確実である。いずれも、張り床の可能性のある堆積土が検出され、この層を掘りこむ浅い土坑が存在し、柱穴の可能性のあるビットもその周囲に検出された。こうした状況からSX100とSX105は竪穴住居となる可能性が想定される。ただし、焼土、灰などが床面から確認されず、また全長が3m未満と小規模であることから、住居と断定することはできない。遺構に伴う遺物は確認できておらず、これらの竪穴状遺構の性格は不明瞭である。

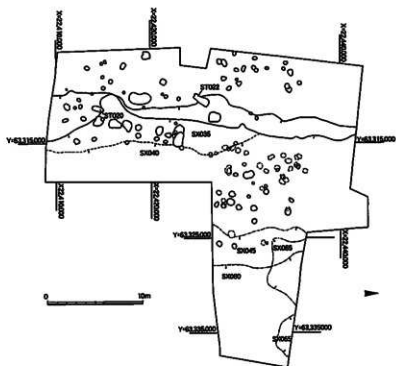
さらに、土坑墓を2基検出した。ST085には伸展姿勢の成人男性の人骨一体が埋葬されていた。この人骨は左腕、左肩甲骨以外の部位はほぼ完全に遺存し、攪乱をほとんど受けていない状態で出土した。頭部と上半身に密着して小児人頭大ほどの自然石が数個人為的に据えられ、とくに右上肢は肩関節が内側におかれた状態で検出された。これらの石は埋葬時の姿勢を規制する意図の下に配置されたようである。下半身は、足先が交差し左右のひざ関節が近接するやや不自然な姿勢であり、埋葬時に緊縛されていた可能性が高い。ST120出土人骨は土坑の大半が削平されているために、上半身と右足が失われているが、骨盤と左足がほぼ原位置を保って検出された。出土状況から、屈伸姿勢で埋葬されていた可能性が高い。SX105からは頭蓋骨の一部が出土している。ST120と同様に削平を受け、原位置も保たないが、これも土坑墓であった可能性が高い。ST085・SX105・ST120からはいずれも遺構に伴う遺物を確認していない。

このほかには土坑を数基検出している。いずれも平面プランが安定し土坑底が平坦である等の特徴を有する。しかしながら原位置を保つ遺物、有機物などは一切確認されておらず、その性格は不明である。

この文化面で検出した各々の遺構から出土する、年代の確定可能な縄文土器は縄B式深鉢の破片のみである。基盤層(SX095)に包含される遺物に縄B式以降の縄文土器が認められることから混入と考えられる。一方でSX132から小池原下層Ⅱ式(水之江1992)(第6図4)の深鉢口縁部が出土していることから、この文化面の時期を縄文時代後期前葉を含む時期に比定する事ができる。出土遺物は縄文時代前期前葉～中葉と、縄文時代後期前葉に限



第3图 第93次调查区第三造梯面略测图 (1/400)



第4图 第93次调查区第一·第二造梯面略测图 (1/400)

られ、前期前葉の文化面はより下位に存在する。従って遺物は1点のみしか出土していないが、この文化面の年代は後期前葉と考えられる。

古代

縄文時代後期前葉の直上の堆積層(SX065・SX070)で、SX070は調査区東端の埋没谷底から、西側の斜面の中段まで堆積が及ぶ。出土する遺物はほぼすべて縄文前期から後期の土器であるが、SX065から少数ながら古代の土師器片(第6図5)が出土していることから堆積年代を古代に比定できる。この層を基盤とする土坑を2基、調査区土層で確認しており、平面では認識できていないが、この時期の文化面が存在するようである。

中世前期(第4図)

SX070の上面には堆積層が複数確認され(SX035・SX040・SX045・SX060)、第93次調査区出土分の大部分を占める、大量の縄文土器が包含されている。しかし一定量の古代の土師器、須恵器類も出土し、また、SX035からⅢ-2期(尾上1983)に編年される和泉型瓦器碗(第6図7)や土師質鍋(第6図10・11)、SX045から輸入白磁ⅢⅧ類(第6図8)、SX060から輸入白磁Ⅳ類(第6図9)などの、中世前期に比定される遺物が出土している。最も下位のSX045とSX060出土物の年代は12世紀後葉に、最も上位のSX035が13世紀前葉に位置づけられることから、これらの層が短期間に形成されていることが分かる。

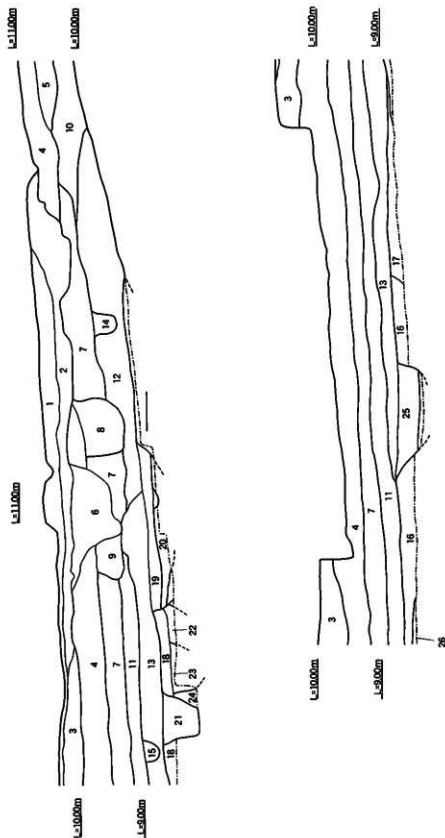
また、これらを基盤層とする遺構を数多く検出しており、調査区の東端を除きほぼ全面に、規則的な配置こそ示さないが、柱穴跡と土坑が多く分布する。これらの遺構は特に調査区の西半で各堆積層に確認され重複関係も示すことから、短期間に繰り返し人為的な改変が施されたことが推測される。

この時期の遺構検出面は調査区西側の1/3程は自然地形の段丘礫層が露出するが、西から東に下る斜面は堆積土が厚い。斜面の上部が堆積土によって地形が改変され斜面の下部に比べて傾斜が緩やかとなっている。この緩やかな斜面の南半部分で副葬品が伴う土坑墓を2基(ST020、ST022)確認している。ST020は南北方向を主軸とする小規模な土坑墓で、墓坑底北側には研磨土師器碗が正位置で掘えられ、墓坑底中央やや南寄りの地点では長軸に直交して小刀が副葬されていた。ST022は南北方向を主軸とし、鏡箱に納められた銅鏡、横櫛、毛抜き、鉄製紡錘車、白磁Ⅳ類が一括して副葬され、さらに土師質鍋が伏せた状態で納置されていた。ST020はSX040を基盤層とし、研磨土師器碗の形態から12世紀後葉以降に位置づけられる。ST022は段丘礫層を基盤面とし、堆積層との対応関係は不明であるが、白磁Ⅳ類の存在と土師質鍋の特徴から12世紀後葉に位置づけられる。この2基の周辺は調査区南半一帯では土坑墓の可能性のある土坑群が検出されており、この一帯は中世前期の墓域であったのかもしれない。

戦国期

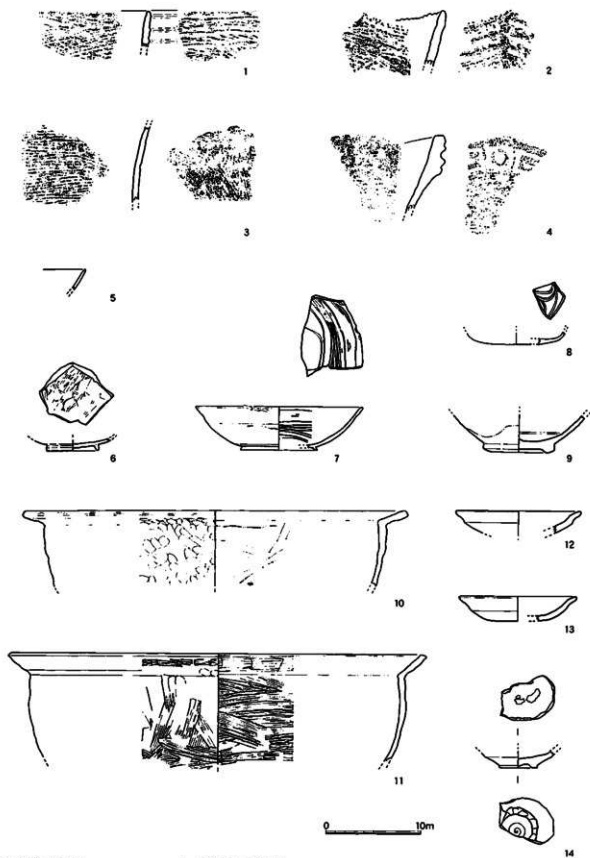
中世前期の堆積層の上面に調査区のほぼ全域を覆う同一の堆積層を確認している(SX004)。この層には遺物がほとんど含まれず、より下位の堆積層では出土遺物のうち縄文土器が多数を占めるのに対し、古代の土師器が大部分を占め中世の輸入陶磁器が一定量出土するなど明らかに異なった様相を呈す。京都系土師器Ⅲ(第6図12・13)、胎土目紋朝鮮産陶器碗(第6図14)が出土していることから、この層の年代は16世紀後半頃に比定される。

第93次調査区では縄文時代、古代、中世前期の遺構が確認された。調査の当初の目的は、調査区東半部の谷底から調査区以西に展開する台地上平坦面に向かって上る斜面に於ける、縄文時代の遺構の検出であったが、この斜面では古代、中世前期の堆積層の直下で堅固な段丘礫層が露出し、縄文時代に比定される遺構はまったく確認できなかった。しかし、斜面下の谷底に近い地点では縄文時代の遺構が多く検出された。前期前葉の堆積層はごく限られた面積を検出したのみであるが、獣骨屑と土坑敷基が確認されており、この文化面にはさらに多くの遺構の存在が期待できる。また、縄文時代後期前葉に比定される文化面で竇穴状遺構と土坑墓が検出されたのが今回の調査の特筆すべき成果である。竇穴状遺構2基は隣接する第87次調査区でこの時期の地床跡が確認されていることと照合すれば、この場所が居住空間であった可能性を示唆する。また、土坑墓はいずれも人骨を伴うも



1. 泥土
2. 砂土
3. 茶褐色砂質シルト(SX004, 深くしまり, 黄色, 褐色を含む,)
4. 茶褐色砂質シルト(5~15cm次の層を次層に含む, 泥質粘土)
5. 黄褐色砂質シルト(5~15cm次の層を次層に含む, 泥質粘土)
6. カクラン
7. 黄褐色砂質シルト(SX035, 黄色, 褐色粘土を多量に含む,)
8. 黄褐色砂質シルト(しまりが著しく, 泥質粘土)
9. 黄褐色砂質シルト(泥質粘土)
10. やや暗い赤褐色のシルト(SX040, 黄, 褐色粘土を含む,)
11. 黄褐色砂質シルト(SX045, SX090)
12. 茶褐色シルト(SX004)
13. やや暗い茶褐色シルト(黄色, 白色粘土を一定量含む)
14. 暗褐色シルト(泥質粘土)
15. 暗褐色シルト(泥質粘土)
16. 黄褐色シルト(黄色粘土を非常に多量に含む, SX095)
17. やや暗い黄褐色シルト(SX095)
18. 黄褐色シルト(微細な白色粘土を少量含む, SX095)
19. SX100粘土
20. SX100粘土
21. SX124粘土
22. 黄褐色シルト(泥質粘土)
23. 灰色シルト(泥質粘土)
24. 暗褐色シルト(SX135)
25. SX115粘土
26. 黄褐色シルト(SX135)

第5図 第93次調査区東南海上層図 (1/60)



- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. 鳥居式深鉢 (SX095) | 8. 白磁皿M類 (SX045) |
| 2. 羽島下層Ⅲ式並行深鉢 (SX095) | 9. 白磁碗M類 (SX065) |
| 3. 羽島下層Ⅲ式並行深鉢 (SX095) | 10. 土師質鍋 (SX035) |
| 4. 小池原下層Ⅱ式深鉢 (SX132) | 11. 土師質鍋 (SX035) |
| 5. 土師鉢 杯 (SX065) | 12. 京都系土師器皿 (SX004) |
| 6. 畿内系瓦器碗 (SX040) | 13. 京都系土師器皿 (SX004) |
| 7. 和泉型瓦器碗 (SX035) | 14. 胎土目紋研鉢産陶器碗 (SX004) |

第6図 第93次調査区出土物実測図 (1/4)

のであり互いに近い地点に立地することから、墓域としても機能したことが推測できよう。

古代、中世前期に比定される堆積層は、大量の縄文土器が出土しその中にごく少数ながら堆積の年代を示す遺物が含まれている、という状況が第82・87次調査でも認識されている。第87次調査区の状況から、昨年度報告段階では中世期の造成によって北に開口する小規模な谷が一挙に埋め立てられその際に大量の縄文土器の二次的移動があった、と評価していたが、第93次調査の結果から仮定できる状況はこれと相当の差異がある。先述のとおり大量の縄文土器を包含する古代の堆積層(SX070)が存在し、この層を基盤とする遺構が確認されたことから、規模は小さいが中世以前にも谷を利用するための地盤に伴う縄文土器の二次的移動があったと想定できる。また中世段階の造成についても短期間に谷が埋没するとはいえ各堆積層に文化面が形成されることから、12世紀後半から13世紀前半にかけてある程度の期間において小規模な造成が3回以上行なわれ、その結果谷が埋没したと推測されるのである。

中世前期の遺構については、副葬品を伴う土坑墓が目立つ。とりわけST022には銅鏡、化粧道具類、完形の中国製白磁碗などが副葬されており、被葬者が富裕層であったことが推測できる。大分市内で初めて中世墓から出土した銅鏡は、鏡背面に横溝が密着しているため文様が判然としないが、外周部分のほぼ全面に曲物状の木質が筒状に付着しており、曲物製の鏡箱に納入されていたようである。類例がごく限られ、全国的にも珍しい事例である。

(3) 横尾遺跡第94次調査

第93次調査の成果を受け、縄文時代の遺構の存在を検証することを目的とし、第93次調査区から20m程西の斜面を上りきった台地上・平坦面に設定した。表土直下で堅固な段丘礫層が姿を現し、遺構はほとんど確認できない。古代に比定できる堆積が一部で確認されたが、その下位からも縄文時代の遺構は検出していない。

(4) 横尾遺跡第95次調査

第93次調査区の西隣に位置し、斜面を上りきった平坦面の端に位置する。第94次地点と同様に表土直下に段丘礫層が存在する。少数の柱穴跡と土坑を検出している。

(5) 横尾遺跡第96次調査

第82次調査区から北西へ35mほどの地点に位置する。第82・87・93次調査区で検出された北に開口する小規模な埋没谷と、より北側で展開する、東に開口する大規模な谷との結節点に形成された舌状地形の根元に当たる。表土直下で時期不明の遺構面があり、その下位には16世紀末を上限とする堆積層を確認した。表土直下で段丘礫層が露出する周辺の調査区と異なり、さらに下位に縄文時代の遺構面が存在する可能性がある。

(6) 横尾遺跡第97次調査

第93次地点の北隣であり、また、第82次調査区から15mほど西に位置する。谷から西側の台地に向かって上がる斜面である。第82・87次調査区で出土した大量の縄文土器の帰属地の候補地であり、そして位置的に第82次調査区の「水場の遺構」に関連する遺構の存在も期待される。調査区内の大半を占める斜面は表土直下から段丘礫層が現れ、第93次調査で見られた古代から戦国期の堆積は確認されない。調査区北半分は宅地の造成に伴って大規模な地形改変を受け、段丘礫層で形成されるならかな斜面が急角度に削られていて遺構は一切確認されない。一方で調査区南半の東端部分では第93次調査区の状況に対応する中世前期から戦国期の堆積土層を確認しており、縄文時代から中世前期の遺構面が今後確認される可能性がある。

第3章 まとめ

(1) 横尾遺跡第93次調査区 縄文時代後期前葉文化面で検出した人骨の帰属年代について

第93次調査では縄文時代の遺構面で土坑墓2基と、土坑墓の可能性のある土坑を1基検出した。これらの埋葬人骨は堆積層の掘り下げ中に発見されたものであり、文化面検出後に各遺構を確定する、という通常の手法によって調査されたものではない。また、上層で中世前期の土坑墓が検出され、さらに横尾貝塚埋葬人骨はすべて屈葬姿勢であったのと対照的にST085の埋葬人骨は縄文時代の九州では非常にまれな伸展姿勢であることから、これらの人骨の年代比定は容易ではない。

しかし、SX105・ST120出土人骨は直上のSX070の最下部と同じ標高で、かつその堆積ラインと平行にカットされていることから、これらの人骨は古代の堆積層が形成される直前に削平を被り、その残存部分が今回の調査で検出されたと考えられる。したがって、SX105・ST120の年代は少なくとも古代もしくはより以前に推定できるのである。SX070に包含される遺物は、縄文土器が圧倒的に主体を占め古代の土師器片がごく数点含まれるに過ぎず、その中間となる時代の遺物は存在しない。よって、SX070の堆積に伴って破壊されたのは縄文時代後期前葉に形成された文化面である可能性が高い、と現状では解釈している。ST085・SX105・ST120出土人骨に関しては今後理化学的分析による年代測定を予定している。

(2) 縄文時代の地形復原と遺跡の立地について

今年度第93次調査地点で確認した竪穴状遺構と埋葬人骨の伴う土坑墓は、横尾貝塚第1・2次調査区(高橋・吉留1982)でも同様に検出されている。第93次調査区の東側には微高地が南北に伸びていた事が昨年度の確認調査によって明らかになっ



第7図 横尾貝塚周辺古地形復原想定図

ているが、この微高地の東側の乙津川沿いに横尾貝塚が立地するのである。すなわち微高地をはさんで西側に第93次調査区が、東側に横尾貝塚が存在するのであるが、横尾貝塚第1・2次調査区ではこの微高地の東縁で竪穴状遺構1基が、さらに東へ下った低地から横尾貝塚の貝屑と土坑墓が検出されている。第93次調査区の様相はこれと対称的に微高地の西縁から谷底にかけて緩やかに下る地点に竪穴状遺構と土坑墓が立地している。また、横尾貝塚と第87次調査区の小規模貝塚も同様の位置関係にある。従って、微高地の東西に展開する遺構群は有機的な関係を持つ一連のものとして解釈できるのである。

一方で、西側から第82・87次調査区に向かって大量に移した縄文土器の帰属は、第93・97次調査区の斜面、そして斜面上の平坦面に設定された第91・94・95次調査区から縄文時代の遺構が全く検出されておらず、いまだに不明である。これらの地点では堆積土がほとんど確認できず、表土直下で段丘礫層が露出する。縄文時代の文化面が存在したとしても、削平を被り完全に破壊されているのであろう。一方で、北に開口する小規模な埋没谷と東に開口する大規模な谷の結節点となる、舌状地形の根元にあたる第96次調査区では表土直下に16世紀末を上限とする堆積層が存在することから、縄文時代の文化面が下位に残っている可能性が高い。この調査区一帯は従来の確認調査地点と比して標高が高いことから、縄文時代の本来の地形が地表下で保たれているのではないだろうか。立地としても二つの谷の結節点であり、これらの谷での縄文人の生活を復原する上で重要な地点となる。

また、今年度をもって第82次調査に端を発した小規模な谷周辺の調査は一通り完了したことになり、今後は西に展開する台地上平坦面や、東に開口する大規模な谷、二つの谷の結節点となる舌状台地、そして横尾貝塚周辺の状況を解明することが調査の課題となってくる。

参考文献

- 奥村 良一 1998『古代火葬塚の造営とその背景』『古文化談叢』第41巻 九州古文化研究会
- 宮本 一夫 1993『瀬戸内の縄文時代前期の地域展開－江戸川流域の事例を中心に－』『遺跡・遺物の考古学』愛媛県大西町教育委員会
- 水之江和司 1992『小規模土坑式・下坑式土器に関する諸問題－福岡県志賀郡大平村所在、土井道跡出土土器の位置づけ－』
- 『古文化談叢』第27巻 九州古文化研究会
- 高橋弘武・古留秀敏 1982『横尾貝塚発掘調査概報 Ⅱ遺構編－大南線改良工事に伴う発掘調査の概要－』大分県教育委員会

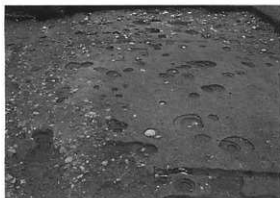


写真3 第91次調査区掘立柱建物跡群検出状況(南より)



写真4 91SX085遺物出土状況(南より)



写真5 第93次調査区周辺空中写真(上が北)



写真6 第93次調査区第1遺構面(北より)



写真7 93ST085埋葬人骨出土状況(東より)



写真8 93ST085埋葬人骨出土状況(北より)



写真9 93ST120・93ST115(東より)



写真10 93ST120・93ST115(北より)



写真11 93SX105頭蓋骨検出状況（東より）



写真12 第93次調査区東南壁土層・SX115（北より）



写真13 93SX100床面ビット完掘状況（南より）

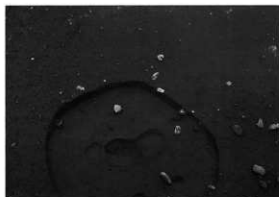


写真14 93SX115床面ビット完掘状況（南より）



写真15 93SX132遺物出土状況（西より）



写真16 93ST022副葬品検出状況（西より）



写真17 93ST022副葬品検出状況（南より）



写真18 93ST020副葬品検出状況（南より）

城原・里遺跡

第8次調査



2005



写真1 調査区全景合成写真（上が北）



写真2 道跡全景合成写真（上が北）

第1章 はじめに

(1) 調査に至る経緯

現在調査を進めている城原・里道跡は、平成14年度、市道の城原・里線道路拡幅工事に伴う第5次調査によって、7世紀中頃～末に比定する評段階の官衙関連施設と思われる竪立柱建物跡群が確認された事を受け、平成15年度より市内道跡確認調査として継続的に行われることとなった。平成15年度には、前年度確認された建物の連続性がさらに確認されたことで大きく4段階に変遷される建物が見つかった。特に1～3期においては、主軸方向を真北よりやや西側に指向する竪立柱建物跡が、ほぼ同一地点において一定の規格性(L字型もしくはコの字型)をもって配置・変遷がなされており、建物施設の範囲をある程度想定できるようになった。

今年度の第8次調査は、昨年度調査を行った第7次調査区の南西側を主な調査対象とし、建物施設の推定範囲における南西側の建物の有無確認、ならびに道跡の性格を把握するために平成16年6月15日～平成17年1月13日にかけて実施した。

(2) 調査組織

調査指導

坂井 秀弥(文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官)

山中 敏史(独立行政法人奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター 遺物調査技術研究室長)

後藤 宗俊(別府大学教授)

渋谷 忠章(大分県教育庁文化財課参事兼課長補佐)

調査主体

大分市教育委員会 教育長 秦 政博

調査担当

池田千太郎 羽田野裕之

発掘調査従事者

植田 高夫 神田ムツ子 佐々木盛子 佐藤 良江 秦 忠次

杉谷 玲子 富永 妙子 直野 俱枝 林 スミエ 姫野 尚之

姫野 学 御手洗幸子 工藤 慎吾 団塚 浩 伊東 祥子

八木 友美 幸 将志

整理作業従事者

山口しのぶ 浦塚亜祥子

調査・報告に際して下記の方々には多くのご指導を頂いた。(敬称略)

西別府元日(広島大学教授)、松原弘宣(愛媛大学)、下村 智(別府大学助教授)



第1図 城原・里遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 城原・里遺跡の調査区位置図(1/5,000)

第2章 調査の概要

城原・里道跡は、大分市大字里に位置し、東西に延びる標高約40mの丘陵東端に所在する。第5～8次調査地点は、同道跡の中でも比較的微高地上に位置し、約400m離れた西側には海部郡衙の政庁跡と考えられている第2～4次調査(中安道跡)が所在する。

今回の調査は第7次調査区の南西側にあたり、主な調査対象である調査区をB区とした上で、A・B・Cの3ヶ所に調査区を設定した。A区は、第5次B区・第6次調査区の北側に位置し、北にやや傾斜した平坦面に設置した。C区は、第7次D区で検出された建物跡の南区域における道構確認の一環として、第7次調査D区より約13m南側に、幅約3m、長さ約10mの調査区を設定した。以下に各調査区についてその概要をまとめる。

A区 確認された道構は、2条の溝状道構、溝あるいは段落ちの道構と考えられる不明道構、13基のピットである。中央部を東西に走る溝状道構(S010)は、最大幅約2.5m、深さ0.04mである。調査区の南側を東西に走る不明道構(S015)は、現状で最大幅0.8m、深さ0.1mである。いずれも弥生土器が出土していることから、第5・6次調査で確認された弥生時代の住居跡や柱穴の関連が指摘できる。

B区 調査区からは、多数の柱穴、4軒の竪穴住居跡、掘立柱建物跡・総柱建物跡が11棟検出された。互いの建物群は、重複がいたって少なく整然とした配置であったが、配置状況や出土遺物の年代、さらには主軸方向や一部の重複関係から、大きく4系列に区分した。なお南側にはC区で検出された堆積土と同一のものが見つかっており、ここから中世の瓦質の揺鉢が確認されている。この堆積層を剥くとSB031の建物柱穴を検出することができた。

●「主軸方向が4～5°西に指向する建物群(SB024・SB023?)」

SB024は、調査区の東側で確認され、南北方向に桁行が延びた掘立柱建物跡である。6間×3間で身舎面積が調査区の中で最も大きい。一部の柱穴で土層観察した結果、規模は、径約1.0m、深さ約0.5mであった。柱穴埋土からは、かえりの付いた須恵器の蓋の破片(R011)が出土し、特徴により飛鳥編年Ⅳ期の7世紀後半代に位置付けられる。建物の東側には桁行方向に柱穴が並び、柱穴の規模が径約0.6m、深さ約0.24mと建物の柱穴より小さいため、庇と考えられる。SB023は、SB024の西側に平行した場所で検出した。建物の桁行が北側の調査区外に延びており、規模は不明である。主軸方向や時期に関しては検討する余地があるが、現状では主軸方向が西に4～5°振るものと考えられる。

●「主軸方向を東北より東に2°振る建物群(SB022・SB031・SB032?)」

3棟の建物は、それぞれの柱筋は揃わないが、SB022とSB031は南北方向を主軸として、現状で南北25m以上に延びる建物配置で、柱間も同一規模である。SB022の柱穴は、径約1.0m、深さ約0.7mの規模であった。SB032はSB022・031に直行し、更に東側に延びる可能性があり、検討の余地がある。出土遺物は、SB022の柱穴(S023)の掘り方埋土から須恵器のかえりの付いた蓋の破片(R004)、柱穴(S072)の掘り方埋土から須恵器の蓋のつまみ部分(R007)、柱穴(S034)の掘り方埋土から須恵器の高台付杯の破片(R008)が出土し、高台部分の特徴により飛鳥編年Ⅳ期の7世紀後半代に位置付けられることが分かった。

●「調査区の西側に縦列配置された総柱建物群(SB027・SB028・SB029・SB033)」

4棟の総柱建物跡は、東側の柱筋が揃っていることから正面観を東側に意識して建てられた可能性がある。SB027の柱穴は、径約0.9m、深さ約0.4mの規模であった。出土遺物が小片であるため時期は確定できないが、SB028の柱穴の一部が中世の溝に埋されていることや主軸方向がこれまで確認された7世紀後半代の建物方向と類似すること、堆積土の観察から7世紀後半代～8世紀前後の範疇に収まるものと考えられる。この総柱建物跡は、小規模であるが、約10㎡と約13㎡の2法量の身舎面積が存在する。

●「東に大きく振る総柱建物群(SB025・SB026・SB030)」

3棟の総柱建物群は、これまで検出した建物の方位とは異なり、東に大きく振る。SB025の柱穴は、径約0.4m、深さ約0.11mであり、規模は小さく深さの残存状況が良くない。総柱建物群の堆積土は、古墳時代以前によく見られる暗褐色土であること、古墳時代に比定されるSH115の住居跡と同一方位を取ること、SB022との重複関係から、少なくとも古墳時代から7世紀後半以前までの年代幅に収まるものと考えられる。

C区 遺構は、北側に柱穴が確認されたほか、調査区の中央から南側にかけて基盤面を掘り下げた後に異なった堆積土を埋めた状況が確認された。この堆積土は厚さ約15cmあり、調査区の中央部付近から垂直に掘り込まれ、南に向かって緩やかに傾斜している。堆積土はB区南側でも確認され中世の遺物が含まれていることから中世以降の所産と考えられる。この基盤面を削った堆積土を除去したところ、下部より比熱を受けた焼土面や柱穴を検出した。柱穴のなかには、径約0.9m、深さ約0.44mを測り、柱痕が確認できるものがあり、これまで検出された掘立柱建物跡と同等の規模であった。他にも径約1mに達する柱穴が数基確認された。こうした結果より、C区周辺にも古代の掘立柱建物跡が存在することが判明した。

まとめ

今回の調査により、当調査地のB区において7世紀後半～8世紀前後にかけての建物群が展開していたことが判明した。建物群は、各々の方位差や配置の評価によって、現状で少なくとも3回以上の配置変更が認められる。

昨年度までの調査結果を総合すると、SB024の建物評価に関しては、主軸方向や出土遺物より建物群3期に該当すると考えられ、当該期の建物配置状況はL字型またはコの字型の建物配置の中心部に位置する建物跡とも考えられる。このことは、建物群1・2期にL字型またはコの字型を配置する建物群の中心部に儀式的な空間の存在が想定されるのに対し、建物群3期の段階では、儀式的な空間だけではなく実務的な空間が収納空間をとまう施設が存在が考えられる。なお、C区で確認された掘立柱建物跡の一部と思われる柱穴や南に延びているSB031の存在から、C区周辺あるいは建物施設推定範囲の南東側にも建物跡が展開し、3期の建物群がコの字型配置を擁する可能性も示唆できる。今回の調査では、建物群1・2期に比定される建物群と方位を同じくする建物跡が存在しないため、建物配置が閉塞しコの字型の配置を構成しない可能性が高い⁽¹²⁾。

主軸方向を真北より東に2°振る建物群(SB022・SB031・SB032?)は、当地西端部において確認されていることから、現状ではいずれかの段階における施設の外郭線の一部を構成する建物群と考えられる。

調査区の西側で確認された倉庫群(SB027・SB028・SB029・SB033、SB025・SB026・SB030)の存在も、城原・里道跡でこれまで確認されなかった点で看過できない事象である。つまり、当地の丘陵の西端部に建てられていたことや掘立柱建物との配置状況を考慮すると、この場所が倉庫群の領域として確保されていたのであろう。

以上のことから、今年度確認された掘立柱建物跡群は、これまで第5・7次調査で確認された建物群に強く関連するものであり、特に建物群1～3期は、変則的なL字型、コの字型などで構成された官衙的な施設やそれに類する施設と想定される。しかし、全国的に見て評段階の官衙施設は、定型化しておらず未だ不明な点が多いため、今後の調査が期待される。また、第5～8次調査と第2～4次調査(中安道跡)との関係についても、7世紀末頃～8世紀初め頃において両者の動向に大きな変化が見られることから、海部郡における郡衙(評衙)の成立過程の重要性が指摘されている⁽¹²⁾。

〈注〉(注1)山中先生指導による。

(注2)堀地 潤一 2004「豊後国における8・9世紀の道跡動向—乙津川流域を中心として」『第7回 西海道古代官衙研究会資料集』

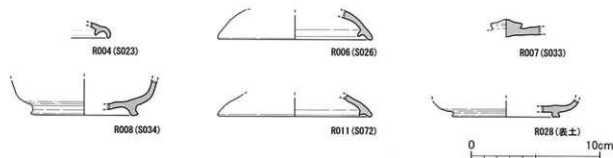
〈参考文献〉

大分市教育委員会 2004「城原・里道跡第7次調査」『大分市 市内道跡確認調査概報—2003年度—』

大分市教育委員会 2000「中安道跡第2次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.11 1999年度』

	遺構名	規 模	柱間寸法 (桁行×梁行)	建物方位	身舎面積
建物群 1 期	SB005	2 間×5 間、4.4×10.5m	1.9m×2.0~2.2m	東西N-12°-W	43.84㎡
	SB008	3 間×2 間、5.2×4.2m	1.8~1.9m×1.9m	東西N-11°-W	21.12㎡
	SB015	5 間×2 間+ α 、9.4×3.9+ α m	1.9~2.1m×1.9m	南北N-11°-W	不明
	SB021	4 間+ α 、6.1+ α m	1.8~2.0m	東西N-11°-W	不明
建物群 2 期	SB001	2 間×2 間、3.6×3.9m	1.8~1.9m×1.8~1.9m	N-6°-W	13.68㎡
	SB002	2 間×5 間+ α 、3.9×8.2+ α m	1.5m×2.1m	南北N-7°-W	32.34㎡
	SB004	3 間×5 間、4.8×10.1m	1.9~2.2m×1.6~1.7m	東西N-7°-W	48.31㎡
	SB006	8 間×2 間、13.9×3.8m	1.6m×1.8~1.9m	東西N-6°-W	52.86㎡
	SB016	4 間+ α 間、7.6+ α ×1.6+ α m	1.8m×1.9m	南北N-6°-W	不明
	SB020	3 間+ α ×3 間+ α 、6.2+ α ×0.9+ α m	1.6m×1.8m	東西N-6°-W	不明
建物群 3 期	SB003	3 間×7 間、5.4×11.4m	1.5~1.7m×1.8m	東西N-4°-W	63.59㎡
	SB007	2 間×2 間、3.4×3.4m	1.7~1.8m×1.6~1.7m	東西N-5°-W	11.11㎡
	SB009	5 間×2 間、10.4×4.6m	1.5~1.8m×2.2m	東西N-5°-W	46.89㎡
	SB011	5 間×3 間、12.4×5.1m	1.5~1.7m×1.8~1.9m	南北N-5°-W	61.71㎡
	SB018	3 間+ α ×2 間+ α 、6.6+ α ×4.7m	1.5~1.7m×1.9m	東西N-5°-W	不明
	SB012	7 間×3 間、12.6×5.2m	1.7~1.9m×1.6~1.8m	南北N-2°-W	59.63㎡
建物群 4 期	SB013	6 間×3 間、11.0×5.4m	1.6~1.8m×1.7~1.9m	南北 (真 北)	65.74㎡
	SB014	5 間×2 間、8.3×3.8m	1.8m×1.8m	南北 (真 北)	31.45㎡
	SB022	5 間×2 間、10.1×4.14m	2~2.1m×2 m	南北N-2°-E	42.87㎡
城原・里 8 次	SB023	2 間×2+ α 間、4 m×4.6m+ α m (東に庇付き?)	2.3~2.4m×2.2~2.4m	南北N-4~5°-W	18.07㎡以上
	SB024	6 間×3 間、10.19m×4.9m (東に一部庇付き?)	1.6~1.7m×1.5m	南北N-4°-W	59.75㎡
	SB025	2 間×2 間、3.5m×3.3m	1.8m×1.6m	北東N-36°-E	11.44㎡
	SB026	2 間×2 間、3.3m×2.7m	1.6m×1.3~1.4m	北東N-43°-W	8.94㎡
	SB027	2 間×2 間、3.5m×3.5m	1.7~1.8m×1.7~1.8m	南北 (真 北)	12.78㎡
	SB028	2 間×2 間、3.4m×3.0m	1.4~1.5m	南北 (真 北)	9.96㎡
	SB029	2 間×2 間?、? m×3.0m	1.4~1.5m	南北 (真 北)	9.06㎡
	SB030	2 間×2 間、2.9m×3.0m	1.5~1.6m	北東N-52°-E	8.13㎡
	SB031	3 間×3+ α 間、4.6m×6.3+ α m	2.2~2.4m	南北N-2°-E	42.83㎡以上
	SB032	2 間×3 間、2.8m×4.9m	1.7m×1.4m	南北N-2°-E	14.82㎡以上
	SB033	2 間×2 間、3.5m×? m	1.7~1.8m×1.7~1.8m	南北 (真 北)	不明

表 1 掘立柱建物跡一覧表



第 4 図 出土遺物実測図 (1/3)

A区



写真3 A区検出状況(東から)

B区



写真4 SB023(南から)



写真5 SB022検出状況(北から)



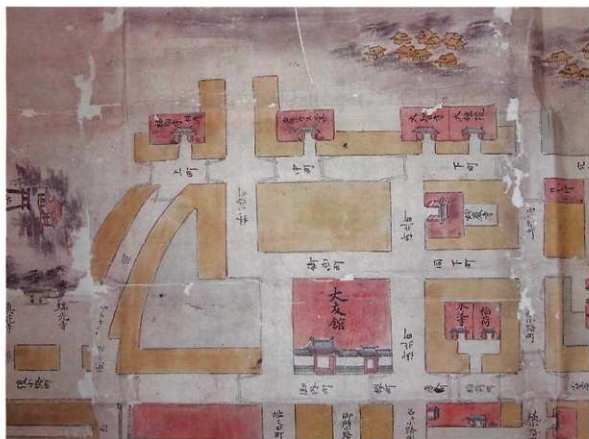
写真6 SB024(南から)



写真7 SB027・028・033(南から)

大友氏館跡

中世大友府内町跡



2005



第1図 これまでの中世大友城下町跡調査地点と府内復原想定図（1/8000）〔2005改正〕

第1章 はじめに

(1) 調査に至る経緯

本年度の太友氏関連遺跡の確認調査は、太友氏館跡－3地点、中世大友府内町跡－6地点を数える。太友氏館跡の調査は、推定館跡北東部の遺構の面的な広がりの確認を目的とした第14・15次調査について、昨年度から継続して実施した。また、推定館跡南東部において、庭園跡北側の状況把握を目的とした調査[第16次調査]を実施している。

中世大友府内町跡－町屋部分に関しては、推定館跡西側付近でその西側の確定及び状況把握を目的とした調査[第44次・44-2次調査]、推定第四南北街路跡の西側－キリシタン関連施設推定地の状況把握を目的とした調査[第45次調査]、推定万寿寺跡南付近の状況把握を目的とした調査[第46次調査]、推定称名寺跡周辺の調査[第47次調査]を実施した。加えて、推定御蔵場跡の南側と推定ノコギリ町との境付近－道路跡が想定される地点の調査[第50次調査]と昨年度確認調査[第33次調査]を行った「府内復原想定図」による府内町の南東隅部の調査について、より具体的な遺跡の性格・時期を把握する目的で、補足調査[第33-2次調査]を実施している。

太友氏館跡以外の町屋部分での面的な調査に関しては、平成15年度の調査指導者会における指導に基づき、中世大友城下町跡全体像の把握を目的として、昨年度末に調査を実施した中世大友府内町跡第38次調査より行なっている。

(2) 調査組織

調査指導者 河原 純之（川村学園女子大学教授）

後藤 宗俊（別府大学教授）

小野 正敏（国立歴史民俗博物館助教授）

坂井 秀弥（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）

渋谷 忠章（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）

調査指導 大分県教育委員会

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

調査担当 坪根 伸也 中西 武尚 佐藤 道文 服部 貞和 松尾 聡 森岡 晃司

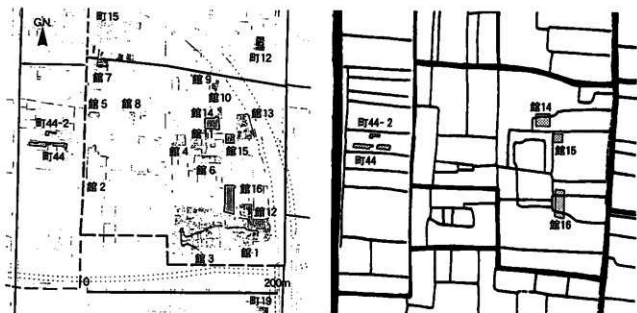
発掘調査従事者

安東 隆司	伊藤 輝喜	伊東 伴恭	大久保覚至	三重野 孜	安井由加梨
中野 聖子	三浦 陽子	柴田アイ子	近藤 慎也	安部 俊介	亀山 晃宏
池辺 勝也	上野 美奈	後藤 好美	長岡 直義	長岡 宣子	植木エミ子
江藤 隼子	佐藤 公信	長岡 照美	柳井 治夫	末吉 理恵	若佐 健二
神田 貞臣	石川 優生	久保田由紀子	原 健治	安部 康子	市野瀬勝正
加藤美枝子	佐藤 和美	佐藤 恭子	高橋 抄子	那賀 貴子	

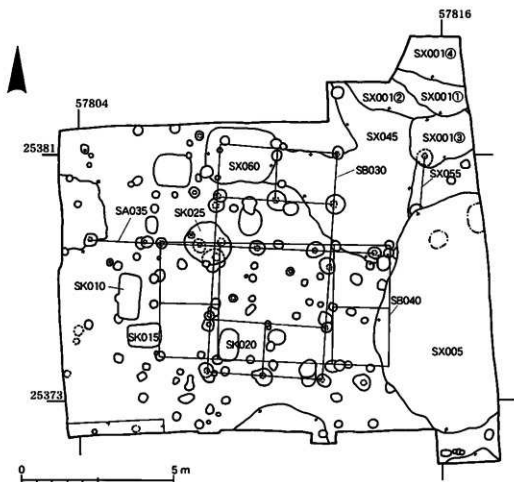
整理作業従事者

西田 裕子	小野千恵美	佐藤 花絵	溝辺 尚子	西村 大
本田理恵子	佐々木晶美	武藤由紀子	羽田 裕子	梅木 信宏

- ・調査に関しては、県教育委員会調査分との整合をはかるために、市教委と合同の調査指導者会を開催し、調査の方法についても可能な限り共通理解の中で進捗させるようにとめている。
- ・遺跡名に関しては、その構成要素である町屋部分を「中世大友府内町跡」とし、これに「太友氏館跡」を加えた遺跡総体を「中世大友城下町跡」と呼称する。（略記号：「中世大友府内町跡」－「町」、「太友氏館跡」－「館」）
- ・本書の執筆・編集は、中西・佐藤が担当し、各文面に記している。



第2図 大友氏館跡調査位置図と明治時代初期にみる地籍図



第3図 第14次調査区道構配置図 (1/125)

第2章 調査の概要

(1) 大友氏館跡 第14次調査

第14次調査区は、推定大友氏館跡の北東部にあたり、明治時代初め地籍図でみると、東西方向に延びる地割の西端付近にあたる。これまでの周辺調査区では、第10次調査B地点の南側に位置する。推定大友氏館跡北東部の遺構の面的な広がりや確認を目的として、昨年度からの継続で調査を実施している。

調査地は、現状の地表面が周辺よりも高くなっており(第10次—4.7mに対し、第14次—5.4m)、推定館跡の中心建物の一角を担う可能性も指摘されていた。しかし試掘トレンチをあけたところ、一段高くなっているのは近代の宅地造成によるものということが判明し、さらにその下層には水田層が認められた。遺構検出面は標高約4.4~4.2mであり、第6次調査の検出面(盛土上面)約5.1m、第12次調査の検出面(15世紀代の遺構検出面)約4.7mに比べて低くなっており、水田耕作等により削平されていると考えられる。

検出した遺構には、廃棄遺構群[館14SX001・005]や掘立柱建物跡[館14SB030・040]、柵跡[館14SA035]、土坑[館14SK010・015・020・025]、その他[館14SX045・055]などがある。

館14SX001は、第10次調査の続きと考えられる多量の土師器片を含む廃棄遺構群で、調査区北東部で検出されている。これらはいくつかのブロックにまとまっており、一番北側のブロック[館14SX001④]は、水田層の落ちのプランにあたる。検出面から約0.5m下がりがながら北側に落ちていく状況がみられ、第10次調査の廃棄遺構群の検出面が、約4.0m前後と第14次調査よりも低くなっているのはこのためと考えられる。さらに第10次調査で確認されているような整地層(標高約4.2m)は、今回の調査地では確認できず、本来、今次調査区が一段高かった可能性も指摘できる。また、地籍図にみられる地割の境と、この落ちのラインが一致していることは注目される。

館14SX001①は、館14SX001④により上面・北側に削平をうけているが、現状で大きく3層の土師器廃棄層が確認できる。土師器のほとんどは京都系土師器であり、埋土内ものは完存品に近い状態で廃棄されているが、遺構上部のものについては、水田耕作に伴い投棄されている。館14SX001③は、館14SX001①に切られているが、上部の土師器廃棄層は浅く、館14SX001①上部と同じ状況を呈している。館14SX001②は、出土遺物から後述する掘立柱建物跡に伴う整地層の可能性が考えられる。

館14SX005は、館14SX001の南側に展開する長軸約8m・深さ約1mを測る大形の掘り込みをもつ廃棄遺構である。土層観察から下部にシルト系の自然堆積層が認められることから、一時期掘削された状態で機能していたことが考えられ、その時期は下層より出土した備前焼掘鉢から16世紀後葉に比定される。その後、埋め戻されたものと考えられる。埋土には、京都系土師器のほか多量のロクロ目土師器を含むが、周辺からの混入品の可能性が高い。検出面上面には、館14SX001①・③と同様に完形品に近い京都系土師器の集中廃棄がブロック状に確認できる。これらの廃棄遺構群は、第10次調査地点も含み16世紀中葉～後葉にかけて、今次調査区の東側で南北方向へ断続的に形成され、この両側どちらかに南北方向の区画を示唆する施設があった可能性も指摘できる。

この他、京都系土師器を伴う遺構としては、館14SK010・020の土坑群がある。いずれも南北方向に主軸をもつ長土坑である。埋土内には土師器片が多数含まれており、現状では遺構の性格を廃棄土坑と考えておく。

次に京都系土師器を伴わない段階の遺構について記す。掘立柱建物跡[館14SB030・040]と柵跡[館14SA035]は、それぞれ同じ場所でも短期間の間に建て替えがおこなわれている。館14SB040は、現状2間×4間の東西棟で、柱間1.96mを基本としている。建物方位は、N-1°20'8"-Eを示す。館14SB030は、2間×4間の規模をもつ南北棟で、柱間は中央の2間分は平均1.96m、南北に延びる各柱間は、平均1.76mを測る。建物方位は、N-3°50'46"-Eを示し、最低でも2度の建て替えが確認できる。柱穴の底には礎パンとしての礎が置かれるものもみられ、また、建て替えの際にかき上げをし、そこに礎パンとしての礎を置くものも看取できる。さらに建物の東側には、約2.8mの間隔をあけて、同じ埋土をもつ館14SX055の柱穴列が同一軸上に確認できる。大部分が館14SX001・0

05により削平をうけているが、同一規模の建物跡が建っていた可能性が指摘できる。また館14SX001・005は、時期的には新しく位置付けられるが、軸線が同じ方向を示しており、こうした区割りを踏襲したものとも考えられる。

館14SA035は、東西方向の柵跡で、柱間平均1.82mを測り、最も東側のみ2.00mと長くなっている。方位は、 $N-2^{\circ}19'52"-E$ を示す。現状柱穴は深さ約0.1～0.2mと浅く、本来は現検出面よりも掘り込み位置が高かったものと考えられる。これらの各建物跡は、館14SK025とした廃棄土坑にそれぞれが切られており、16世紀前葉以前の所産時期が考えられる。建物跡の変遷については、互いに直接的な新旧関係をもっていないため確実な前後関係は不明であるが、建物方位・出土遺物から館14SB040→館14SA035→館14SB030の変遷が考えられ、およそ15世紀後葉～16世紀前葉の範疇におさまるものと考えられる。これまで館内の調査で確認されている掘立柱建物跡の方位としては、15世紀前葉と考えられている館12SB035・SB050・SB145が約 3° 、それに先行する館12SB045が約 2° 東に振ることが報告されているが、建物方位による明確な変遷はわかっていない。

館14SX001②は、調査区北側の他よりも0.1mほど高い場所で検出されている整地層であるが、出土遺物から上記の建物群に伴う整地層であることが指摘できる。また、この下層からは、硬く締まった埋土をもつ掘り込み遺構〔館14SX045〕が確認できるが、ハコ形を呈す土師器環が主体で出土しており、一時期古い遺構と考えられる。

さらに、現在の遺構検出面である安定面(整地層)下部にも整地層が確認でき、その整地層を掘り下げると、時期は不明であるが柱穴が検出される。

今回確認された建物跡群は、狭い調査区の中で短期間に建て替え、あるいは建物構造の変更を行っており、今後の周辺調査によりその規模・配置について検討していく必要があろう。これにより大友氏館跡の形成・成立過程についてより輪郭が見えてくるものと考えられる。

(中西 武尚)



写真1 館14・15次調査区空中写真(上が北)

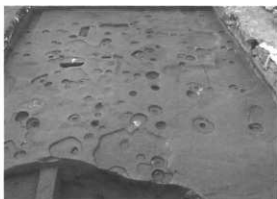


写真2 館14調査区全景(東より)



写真3 館14SX001①遺物出土状況(北より)



写真4 館14SX005土層観察時(西より)

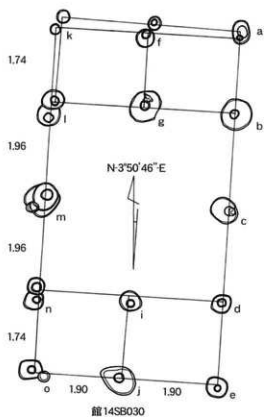


写真5 館14SB030g礎パン及び下部柱痕検出状況（南より）

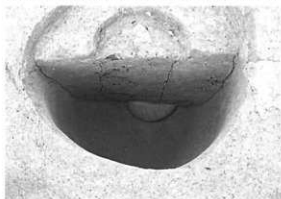
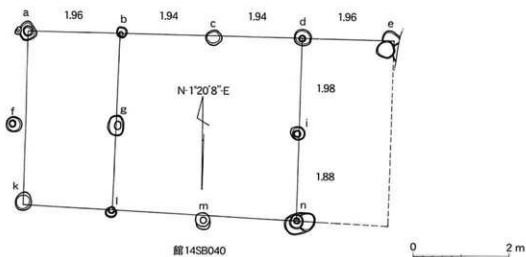
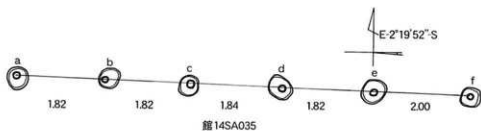


写真6 館14SB030d土層観察及び礎パン検出状況（南より）



第4図 第14次調査建物規模と方位（1/80）

(2) 大友氏館跡 第15次調査

第15次調査区は、推定大友氏館跡の北東部にあたり、明治時代初期の地籍図でみると、推定館跡のほぼ中心部で方形に区画された地割のすぐ東側にあたる。これまでの周辺調査区では、第13次調査区と第14次調査区との間の南側に位置し、また今年度調査を実施している第16次調査区の北側約50mの地点に位置する。推定大友氏館跡北東部の遺構の面的な広がりやの確認を目的として、昨年度からの継続で調査を実施している。

調査の結果、第14次調査でも確認されている水田跡により同じく削平をうけ、検出標高も約4.4mとほぼ同じである。検出された遺構には、2条の南北方向の溝状遺構〔館15SD010・025〕、井戸跡〔館15SE018〕、土坑〔館15SK035・045ほか〕、その他不明遺構〔館15SX005〕やピット群などがある。

館15SE018は、直径約2.5mを測る掘り方をもち、井筒部分には直径約0.7mの桶を用いていたと考えられる。深さは検出面から約2.5mを測り、それより下位は砂層になっている。現状では湧水は見られなくなっているが、本来はこの砂層の標高約2.0m付近で湧水があったものと考えられる。井戸廃絶時には、井筒内に巨石を入れ込み井戸封じをおこなっている。この巨石については、周辺の礎石が利用された可能性も考えられる。また最終埋没の段階には、牛あるいは馬の頭骸骨が出土した土坑状のプランが確認されている。牛馬祭祀にかかわる遺構の可能性も考えられるが、礎や遺物などの出土状況から井戸埋め戻し後の凹地に廃棄されたものの可能性が高い。出土遺物では、構築時の裏込めから京都系土師器の坏が出土し、廃棄時の井筒内からも同様の京都系土師器坏の出土がみられる。この遺物から構築・廃棄時期は16世紀後葉～末葉に比定され、この井戸は短期間の間で機能していたものと考えられる。

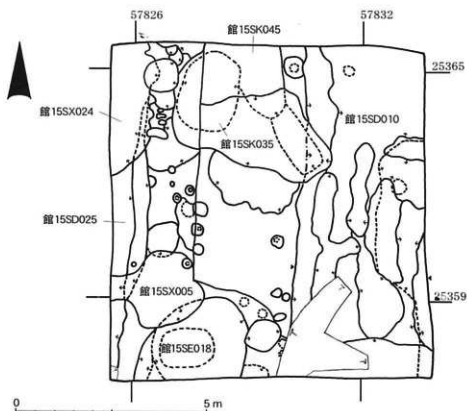
調査区北側で確認された館15SK035・045の周辺では、複雑に切りあった不定形遺構が多く検出されたが、いずれも廃棄土坑と考えられる。出土遺物には、京都系土師器坏・皿をはじめ、中国青花碗・皿(小野分染類付E群)・漳州窯系青花皿・ベトナム長胴瓶などがみられ、16世紀後葉～末葉に比定される。また、土師質鍋・鉢などの生活雑器類の出土も目立ってくる。

館15SD025については、調査区の西側で遺構の東部の一部を確認したのみであり、その規模等は不明であるが、ほぼ垂直に近いかたちで掘り込まれており、規模の大きな溝になる可能性も考えられる。南側の延長部は、館中心部の盛土整地の東端付近にあり、それとの関連性が注目される。また、第14次調査東側で確認されている館14SX005との関連性も注目される。出土遺物には京都系土師器がみられるが、詳細な時期比定については困難である。

館15SD010は、現状で幅約3.5m、深さ約2.3mを測る断面V字状を呈する。東側がやや直立気味で、西側は比較的緩やかになっている。土層観察からは数度の掘り返しが認められた。溝の西側には当初の掘削プランが遺存しており、最初は断面逆台形状を呈していたことがうかがえる。この西側では掘り返しに伴い、黄褐色地山ブロックを多く含み、硬く締まった埋土が認められる。西側上部から流れ込んだ崩壊土の可能性が高いが、東側では見られない点や硬く締まっている点などから人為的な埋土の可能性も考えられる。溝の下部にはグライ化した青灰色粘質土層が堆積し、その周囲には厚い鉄分の帯状の沈着が認められることから、この溝には水が堆水していたことがうかがえる。数度の掘り返し後、溝は一気に埋め戻される。その後、溝は調査区東側の際で、さらに掘り返しのプランを確認しているが、調査区外に展開するため規模等は不明である。埋め戻し段階の出土遺物の主体は薄手の京都系土師器となり、機能時(堆水時)の出土遺物は、薄手の京都系土師器とクロ目土師器が主体となる。また、当初の溝掘削段階の遺物には、京都系土師器はみられず、クロ目土師器が主体となる。この溝跡の性格については、推定館内において規模が極めて大きいことから、館が方二町規模に拡張する以前の区画施設になる可能性が考えられる。

この他の遺構には、館15SE018や館15SD025に切られて、在地系のハコ形を呈す土師器を多量に含む土坑状の遺構〔館15SX005〕が確認されている。

(中西 武尚)



第5図 第15次調査区遺構配置図 (1/100)



写真7 館15調査区空中写真(上が北)



写真8 館15調査区全景(南より)

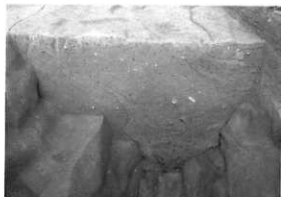


写真9 館15SD010土層観察時(南より)

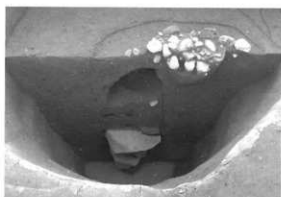


写真10 館15SE018土層観察時(北より)

(3) 大友氏館跡 第16次調査

第16次調査区は、推定大友氏館跡の南東部付近で、庭園跡北側に位置する。庭園跡北側の状況把握を目的として調査を実施している。明治時代初めの地籍図であると、調査地は館跡の門推定地から東西方向に延びる地割の西端付近にあたる。これまでの周辺調査区では、整然と規格された掘立建物群が確認された第12次調査区の西側にあたり、その調査所見からすると特に北側は、表土直下から遺構検出ができる可能性が高く良好な遺構の遺存状況が期待された。

調査の結果、調査区北側では、予想通り表土直下(標高約4.9m)で遺構が検出できた。北側は後世に畠として利用されていた時期があり、その東西方向の畝状遺構で多少の削平はうけているものの比較的残りは良い状況である。中央付近と西側は、大きく根乱により削平をうけている。南側は第12次調査で確認されている水田跡[館12SX040](18世紀以降)の続きを検出しており、これより南は一段低くなる(標高約4.2m)。

検出された遺構には、水田跡[館16SX020]、建物跡[館16SB025]、礎石列[館16SA030]、溝状遺構[館16SD005・040]、土師器集中遺構[館16SX001・002・010]、整地遺構[館16SX045・055]、その他遺構[館16SX035・065]などがある。

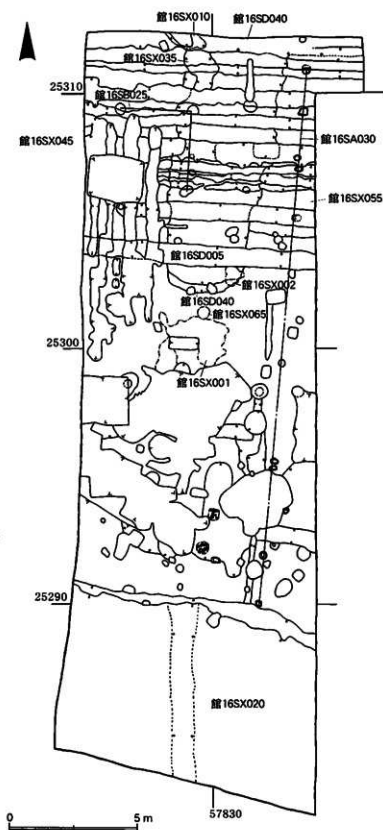
館16SX020は、水田跡で、検出面標高約4.7mから掘り込んで造られている。深さは約0.5mを測り、そこから最低3回のかき上げがおこなわれている。

館16SB025は、調査区の北側で検出した礎石の基礎事業(以下、「下床遺構」と呼称)と考えられるものである。直径約0.5mの不整円形プランを呈し、土師器片や小砂利を敷き礎石の下床を安定させている。本来であればこの上にさらに小砂利を敷き詰め、その上に礎石が置かれるものと考えられる。小砂利が敷詰められた状態の館16SX065は、そのままの上に礎石が置かれる状態の下床遺構と考えられ、館16SX035はやや規模の大きい礎石の下床遺構の可能性が考えられる。いずれも対になるものを検出しておらず推定の域をでないが、今次調査区内に館16SB025以外に礎石建ちの建物のあった可能性が指摘できる。また、この他にも礎石の下床遺構と考えられる遺構が散見でき、今後、周辺の調査も含め詳細な検討が必要と考えられる。館16SB025では、東西1間・南北1間の下床遺構を検出しているが、東西柱間約2.9m・南北柱間約3.0mと間隔が広く、建物規格・構造・配置などについて検討する必要がある。建物の時期は、出土遺物に京都系土師器の破片が多数みられ16世紀中葉～後葉に比定される。

館16SA030は、礎石自体が検出される礎石列である。ところどころ耕作などの削平により消失していると考えられるが、畝状遺構の下から抜き取り痕なども確認でき、現状で館16SX020の水田跡により大きく削平を受けていないところまでの調査区内を南北約21mにわたって確認されている。これらの礎石は、東西のどちらにも展開しておらず、現時点では礎石列として位置付けておく。また、礎石自体は北側と南側にそれぞれまとまりが認められる。北側では、4個(内1個は建て替えに伴うものか)の礎石と礎石の抜き取り痕1基、礎石の下床遺構1基の計4間分を確認できる。柱間は、北側の1間だけ約1.6mを測り、他は約2.0mを測る。南側では、5個(内2個は建て替えに伴うものか)の礎石で3間分(内1間は削平によるものを復元)が検出されている。柱間は南側の1間で計測すると約1.6～1.9mを測る。北側と南側が一連として繋がっていたかは不明であるが、状況としては同一軸線上に並んでおり、一連の礎石列として考えておく。また、時期については不明であり、後述する館16SD040との関連性が注目される。しかしながら、第15次調査の東側の溝跡[館15SD010]の軸線にも一致しておりその関連性も指摘でき、今後の周辺調査の中で検討していく必要がある。

館16SD005は、幅約0.8m・深さ約0.2mを測る浅い東西方向の溝状遺構である。時期は不明であるが、調査地内の中世段階の中で一番新しい遺構である。

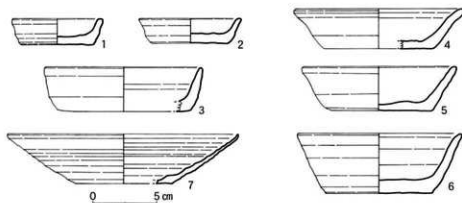
館16SD040は、調査区北側で検出した南北方向の溝状遺構であるが、調査区北側でL字状に東に曲がる。南側は館16SD005により切られたすぐ南へ後述する館16SX001の手前で収束している。埋土は黄褐色のブロック土を多量に含んでおり、明らかに人為的に埋めたものと考えられる。南北の溝状遺構の方向は、館15SD010に一致するが、埋土の状況が全く異なっており、同一遺構とは考え難い。また、時間的に古く位置付けられる。所産時期については、出土遺物に在地系のハコ形の土師器や白色系土師器がみられること、後述する館16SX001の手前



第6図 第16次調査区遺構配置図 (1/150)

で収束することなどから、館16SX001とはほぼ同一時期と考えられる。

館16SX001は、調査区の中央で検出している土師器集中遺構である。明確な掘り込みプランは確認できず、上面を一段下げた段階で検出している。出土している土師器は、在地系のハコ形の土師器や白色系土師器をはじめ瓦器碗など大きく14世紀後半～15世紀代に比定されるものであるが、状況から短期間の間に廃棄されていると考えられ、一括遺物としての資料価値は高いといえる。また、周辺には同様に明確な掘り込みプランをもたない2基の土師器集中遺構[館16SX002・010]を確認している。これらは、先述の館16SD040の検出時あるいは埋土内で確認されている。出土遺物から館16SX001と同一時期と考えられる。尚、これら遺構の基盤面となる整地層[館16SX045・055]からも同様の遺物が出土している。詳細な時期比定については、今後の課題といえる。(中西武尚)



第7図 館16SX002出土遺物 (1/3)

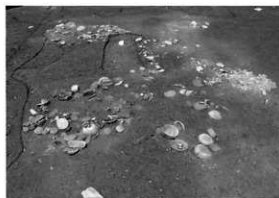


写真11 館16SX001遺物出土状況(東より)



写真12 館16SX002遺物出土状況(北より)

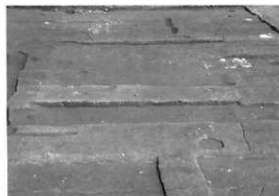


写真13 館16SD040掘下げ状況(南より)

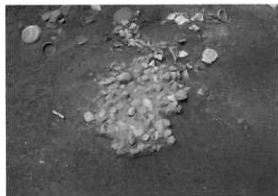


写真14 館16SX065検出状況(北より)

(4) 中世大友府内町跡 第38次調査

調査は共同住宅の建設に伴い、事前の埋蔵文化財確認調査(試掘調査)を実施した。その結果、現地表面から約0.7m下において遺構・遺物が確認された。これを受けて地権者との協議をおこない、工法変更により地下の遺構に影響を与えない盛土保存でおこなう方針が決定された。しかし、調査地は中世大友城下町跡の全体像を解明する上でも重要な地点であり、特に各南北街路筋から奥にはいった町屋の状況把握は必要と考えられた。このため地権者の同意を得、協力のもと、遺跡の状況把握を第一義の目的として確認調査を実施した。

調査地点は「府内復原想定図」により推定されている東側2本の南北道路(通称「第一南北街路」と「第二南北街路」)に挟まれた地区のほぼ中央、推定御所小路町の北側に位置する。調査は建物建設部分をさけ、駐車場予定地を中心に調査区を設定した。北側をA区とし、南側をB区、調査途中に植木の搬出を行なった箇所をC区、さらに南側の植樹林の間でトレンチ調査を行った箇所をD区・E区として実施した。

調査地はもともと植樹林として使用されており、およそ0.7~1.2mの深さで大きく削平をうけていた。遺構の検出標高はA~E区とも約5.0m前後である。

A区で確認された遺構は、南北方向の溝状遺構[町38SD020]、柱穴列[町38SA030]、井戸跡[町38SE007・035]、土坑・ピット群などである。

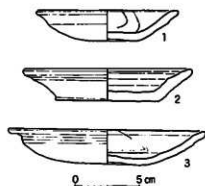
町38SD020は、幅約6mを測り、深さは現状で約1.6mを測る。数度の掘り返しが必要と認められ、遺構の上面からは明らかに祭祀的行為と考えられる合わせ口にした土師器群[町38SX010]を確認した。溝状遺構の掘り下げ途中では、東側に拳大から人頭大の礫が渾然状に充填された箇所が認められるなどしっかりとした造りであることがわかる。調査の制約のため全体の規模・断面形状などは不明であるが、状況から明確な区画を示す遺構として位置付けられる。時期については、出土した土師器から16世紀中葉~後葉に比定される。

町38SA030は、町38SD020の西側に平行する柱穴列である。5間分の約8.4mにわたって検出した。軸線の方位は、N-13°6'57"-Eを示す。各柱間は約1.8~2.0mを測り、北から3・4間目の間ではもう1基ずつ柱穴を検出している。柱穴の平面形は方形のものも円形のものも確認でき、方形のものに柱痕が検出されることが多い。時期については、町38SD020の最終の掘り返しプランに併行することから16世紀後葉と考えられ、また、溝跡同様区画に伴う施設と位置付けられる。

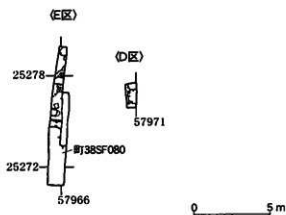
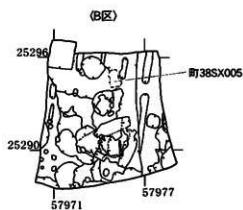
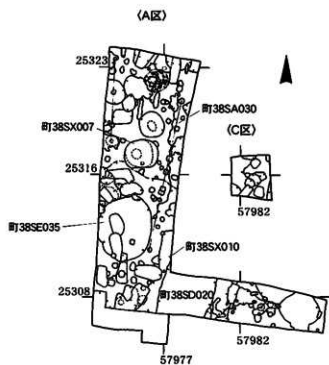
町38SE007・035は、町38SD020の西側に展開する井戸跡である。町38SE007は、直径約2.2mの掘り方をもち、その掘り方の西よりで井筒の痕跡を確認した。井筒部分に直径約0.6mの桶を使用していたと考えられるが、上部は抜き取りのため大きく歪んでいた。裏込めの東端では立板の痕跡が確認でき、井戸構築時あるいは上物構造に関わるものと考えられる。出土遺物から16世紀後葉に比定される。町38SE035は、長軸約4.2m・短軸約3.5mを測る楕円形プランを呈す。埋土の状況から井戸跡と考えられるが、現状は一段掘り下げた状態であり、遺構の切り合いや井筒の痕跡などは確認できず、規模の大きい掘り方をもつ井戸跡の可能性が考えられる。この他、町38SD020の東側においても井戸跡と考えられる遺構が検出されている。

B区では町38SD020の延長部分が確認され、その検出面からは京都系土師器と在地系土師器が一括して出土している[町38SX006]。町38SX010より明確ではないが、合わせ口になっているものが多く、何らかの祭祀遺構と考えられる。この他の遺構では、南側に多数の土坑群が切り合って検出されている。

E区では調査区の中央から南側で、道路状遺構[町38SF080]を確認した。町38SF080は掘り込みを伴う道路状遺構で、土層観察では最低でも3面の砂利や砂敷きの硬化面がみられる。道路状遺構の北端は、当初は側溝として機能していたと考えられる。この町38SF080は、中世大友府内町跡第9次調査地点で確認されている東西道路状遺構(推定御所小路跡)に繋がる道路状遺構であり、推定どおり御所小路に比定される東西道路の追認ができたことは大きな調査成果といえる。また、この道路跡より北側には砂混じりの整地層がみられ、そこに柱穴や礎石と考えられる礫が展開している。狭い範囲での調査のため、明確な建物跡などになるかは不明であるが、B区との状況とは明らかに異なっている。つまり、道路に面して建物などが展開し、B区で検出された土坑群などはまさにその裏手の廃棄空間であったことが推定される。



第8図 町38SX010出土遺物 (1/3)



第9図 第38次調査区道構配置図 (1/250)

加えて、今回の調査の特筆すべき事象として、出土した遺物のほとんどが京都系土師器を中心とした土師器群であることがあげられる。京都系土師器をはじめとする素焼きのかわけ(土師器)の大量廃棄は、大友氏館跡内での出土状況にみられるように「ハレ」の場での儀式・饗宴などの武家儀礼に伴うことが知られており、今次調査における同様な遺物の出土状況は、そうした武家儀礼に携わる人々の存在を想起させる。さらに大規模な区画をもっている状況などから、町屋域とは別の空間としての位置付けが考えられる。(中西 武尚)

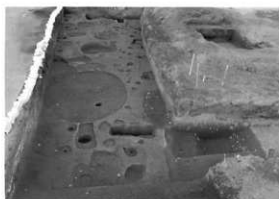


写真15 町38A区遺構検出状況(南より)

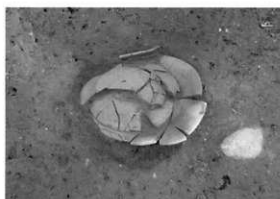


写真16 町38SX010遺物出土状況(西より)



写真17 町38B区遺構検出状況(南より)

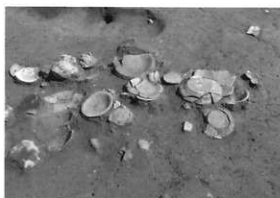


写真18 町38SX005遺物出土状況(西より)



写真19 町38E区遺構検出状況(南より)



写真20 町38SF080土層観察時(西より)

(5) 中世大友府内町跡 第44次調査・第44-2次調査

調査地は、推定大友氏館跡の西側中央と通称「第四南北街路」の間に位置し、推定御西町に比定されている地区である。明治時代初めの地籍図でみると、推定館跡西側外郭線と第四南北街路の間で東西方向に短冊状の地割がみられ、その推定館跡西側のほぼ中央の地割にあたる。これまでの周辺調査区では、大友氏館跡第2次調査区の東側約25mの地点に位置する。推定大友氏館跡西側外郭線の確認及び周辺の状況把握を目的として調査を実施している。調査は敷地内の南側に設定した調査区を中世大友府内町跡第44次調査とし、その後、追認調査として同じ敷地内の北側部分に設定した調査区を第44-2次調査としている。

第44次調査

第44次調査では、調査地の東側から中央にかけて大きく削平されていた。東側で一部遺構が検出された地点をA区とし、すでに破壊されていた場所については埋め戻しをおこない、それより西側の地点をB区として調査を実施した。基本層位としては、現地表一標高約4.7m、標高約4.0m前後までは宅地造成土などの客土がある。これより下位は近世以降の水田層となり、遺構検出面は標高約3.8～3.5mである。

A区では、東西方向の溝状遺構[町44SD010・015・020]や柱穴列[町44SA080・085]などが確認された。町44SD010は浅い溝状遺構で、さらに南に延びており調査地内では規模の確定ができなかった。遺構北側の基底部には凹み状の長土坑が確認でき、南側では埋没のある段階で犬の骨を埋めたと考えられる遺構[町44SX030]が検出された。頭蓋骨・背骨・肋骨などが残っており、頭蓋骨と背骨の間の上からは京都系土師器が出土した。町44SD010からの出土遺物は少なく、北側で確認された長土坑の上面と先の町44SX030、さらにその近辺から完形に近い京都系土師器が出土した程度である。このことから町44SX030で出土した京都系土師器は犬埋葬時の供献品の可能性が考えられる。時期は16世紀中葉～後葉に比定される。また、町44SD010は大友氏館跡第2次調査で確認された16世紀中頃に比定されている溝状遺構[館2SD030]とほぼ同じ方向を示している。しかし、今回の調査で確認されている遺構は、溝状遺構というよりも掘り込みを伴う整地遺構と考えられ、また、上面に切り込んでいた遺構がみられず、推定館跡西側外郭線のほぼ中央に位置していることから西門を想定した時の道路としての可能性も指摘しておきたい。町44SD015は、町44SD010に切られる溝状遺構である。幅約0.35m・深さ約0.15mと規模が小さく、調査区東側で途切れている。また、この南側一町44SD010の下部からも同様な溝状遺構[町44SD020]が確認され、さらに北側では、町44SA080・085の柱穴列が確認された。町44SA080は、東西に2間検出している。柱間は約2.0mを測り、軸線の方位は、E-5°20'16"-Sを示す。町44SA085は、東西に3間検出している。柱間は同じく約2.0mを測り、軸線の方位は、E-3°25'30"-Sを示す。柱穴はどちらも深く、検出面から約0.5～0.7mを測る。町44SA085の西端の柱穴は、上部を大きく削平されておりその基底部のみが残ったものである。現時点では柱穴列と位置付けているが、調査区北・東側にさらに展開するものと考えられる。

以上のようにA区からは、東西方向の区画を示すような遺構群が検出されるのみで、遺構密度としては希薄な状況であった。

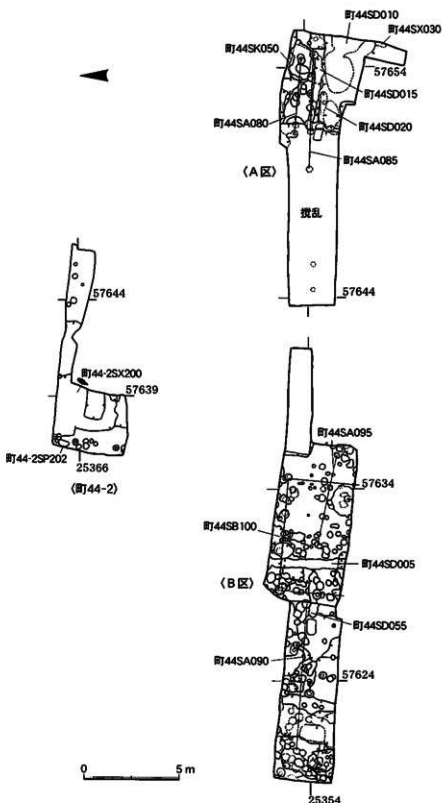
B区ではA区と状況が異なり、整地層や複雑な遺構の切り合い関係、多数の柱穴群が検出されるなど町屋的な様相を示している。調査区の中央では、南北方向の溝状遺構[町44SD005]とそれに直交する東西溝状遺構[町44SD055]などの小区画を示すと考えられる遺構も確認できた。町44SD005の両側には平行していくつもの柱穴群が集中しており関連性が窺える。この他、町44SD005との新旧関係は不明であるが、いくつかの柱穴列[町44SA090・095]や掘立建物跡[町44SB100]を確認している。調査区の制約上、いずれも全体の規模や配置などは不明である。町44SA090では東西に4間検出している。柱間は約2.0mを測り、柱穴の平面形は方形を呈している。これらの遺構群や周辺整地層からは、京都系土師器をはじめ陶磁器類や瓦質・土師質の鍋・鉢などの生活雑器類、あるいは陶形埴なども出土しており、それら出土遺物からおおよそ16世紀後葉を中心とした時期に比定される。

調査の結果、館跡西側外郭線についての明確な区画施設などは確認できなかった。しかしながら、A区とB区での遺構群の様相の違いから、削平をうけた部分に想定することも可能である。この場合、西側外郭線を示す遺構については小規模なものであった可能性が指摘できる。

第44-2次調査

第44次調査の結果をうけ、調査地の中央に存在する大規模な削平〔擾乱〕が収束すると考えられる北側部分について、幅1mほどのトレンチをあけて調査を実施した。その後、調査区西側で確認した溝状の遺構と考えられる町44-2SX200について、その部分を南側に拡張し遺構の性格について再度検討した。擾乱の範囲については、予想以上に広がっていたが、調査区の北壁で擾乱のおよんでいない安定面を確認した。擾乱により削平を受けている箇所は、現地表から約1.3m下(標高約3.3m)で、遺構が円散とした状況で検出されたが、本来は現地表から約0.8m下(標高約3.8m)で遺構が検出される。町44-2SX200は、当初溝状遺構と考えていたが、拡張した南側で完結した。現状での規模は、東西約3.0m・南北約3.2mを測る。深さは約0.3mで、埋土は硬くしまり、東西方向に石列が確認できる。石列は北側に面を合わせていると考えられ、埋土の状況と合わせて、なんらかの地盤強化的な遺構の性格が想定される。その他の遺構には、町44-2SX200の西側の柱穴群がある。中には十数枚の銭貨が出土した柱穴〔町44-2SX202〕もある。

今次調査においても明確な成果は得られなかったが、今後、町44-2SX200の北側への展開状況やこの位置付けが重要になってくると考えられる。今回の2度にわたる調査より、この周辺が大友氏館の方二町拡張段階の西側外郭線になる可能性が高くなったといえる。(中西 武尚)



第10図 第44・44-2次調査区遺構配置図 (1/200)



写真21 町44B区空中写真（上が北）



写真22 町44A区空中写真（上が北）



写真23 町44B区近景（東より）



写真24 町44SA080・085柱痕検出時（北より）



写真25 町44-2 SX200掘下げ時（北より）



写真26 町44SX030犬骨検出状況（西より）



写真27 町44B区調査区南壁土層観察時（北より）



写真28 大規模攪乱土層観察時（北より）

(6) 中世大友府内町跡 第45次調査

調査に至る経緯

調査地は、現況はアスファルト舗装の駐車場であった。この度、当該地への共同住宅建築の計画が持ち上がり埋蔵文化財の照会が行われた。本地点は川世大友府内町跡、第四南北街路沿いに在ったとされるキリシタン関連施設の周辺地にあたり、そのため、特に重要なエリアとして認識されている。昨年度、道路拡幅に伴う発掘調査が実施され、その中で、16世紀後半～末段階の大型建造物の柱穴遺構、15世紀後半～16世紀前半に位置付けられるロクロ目土師器埋設遺構などが発見されている。特に前者は、掘り方約1m以上を有し、柱痕跡から径約20～30cmを有する柱が想定される。配置も約7m間隔で直線的に並び、通常町屋にみられる構造物とは様子が異なる。このように、隣接地でキリシタン施設を窺わせるような遺構が確認されていることから、地権者である木寺十寸恵氏及び設計会社(株)三興住宅とで協議を行い、共同住宅建築の事前に確認調査を行うことで合意した。なお、建物基礎は遺構面まで達することは無く、調査終了後、保護層である砂層で埋戻しを行い、遺跡は破壊されることなく保存されている。

遺跡の概要

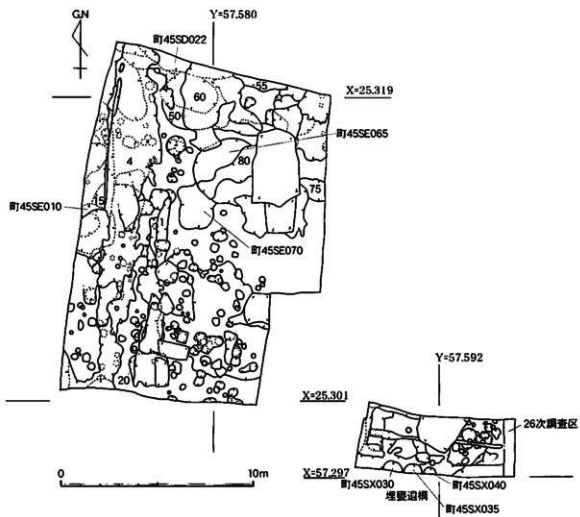
調査区の基盤層は硬質で締まった黄茶褐色土(やや砂状を含む)である。この黄茶褐色土はA区(広い方)の中央から北側にかけては層厚が希薄で、下位に堆積する砂層が表出してくる状況であった。そのためか、建物を構成すると思われる柱穴群は中央から南側に多く検出され、砂層が顕著な部分は井戸跡や溝状遺構など水利に関連する施設が構築されている。調査区の北東部は多様な土壌が複雑に入り乱れていることから整地が行われたと考えられる。

検出された遺構は、柱穴列・井戸跡・溝状遺構・埋設遺構などが挙げられる。柱穴列は建物または欄干の一部と考えられるが、調査区外へと展開することから全容については不明である。埋土は大きく焼土を含むものと含まないものに分けられ、京都系土師器が出土するのは比較的前者に多い。おそらく2時期(段階)にわたって建物が存在したと推測される。井戸跡[町45SE010・012・025・065・070]はすべて16世紀後半～末段階には埋没している。井戸桶が存在したものは1基[町45SE010]だけである。長細い板を組み合わせた結箱であったが現存状況は極めて悪い。町45SE065・070は最終埋没土に多量の焼土塊が混入しており、窪地を利用した単なる廃棄遺構と考えられるが、井戸封じ等に焼土を利用する例があるか検証していく必要があらう。時期は薄手の京都系土師器が出土していることから、現状では16世紀中頃に位置付けられる。埋設遺構[町45SX030・035・040]は矮小な地点(B区)で3基東西方向に連続して検出された。町45SX040が最も残りが良く、甕の底部から体部下半が据えられた状態であった。甕は土師質で、復元すると器高が60cmを越えると推測され、大型品である。平底の底部から大きく逆ハの字状に開き体部へと至る。体部は直立し、口縁部は断面長方形を呈す。現段階では類似資料は無く、今後、産地、時期等の詳細な検討を行ってきたい。この町45SX040の甕内部からは華南三彩の魚形水注が出土している。時期は出土遺物及び層位から考えると16世紀末～17世紀初頭段階には廃棄されていると考えられる。溝状遺構[町45SD004]は調査区西側でみつきり、南北方向に延びる。埋土から耕作に伴うものと思われ、出土遺物から近世以降に埋没していることが分かる。

小結

今回の調査では、キリシタン施設の核心にまではいたらなかった。確認された柱穴群は比較的規格性があり、遺構密度も低いことから町屋のとは言い難い。ただ、キリシタン施設の中心部は礎石立ちであることが想定されるため、柱穴群の性格については、埋設遺構同様に周辺調査と併せた第四南北街路全体の状況をふまえた上で、今後の課題とする。

(佐藤 道文)



第11図 第45次調査区追構配置図 (1/200)



写真29 町45調査区遠景



写真30 町45調査区全景



写真31 町45A区柱穴群近景



写真32 町45B区全景



写真33 町45SX040埋莖遺構検出時

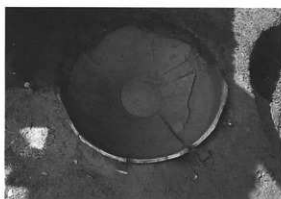


写真34 町45SX040埋莖内部検出時

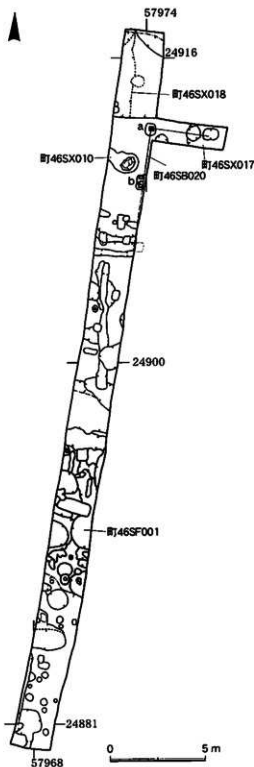
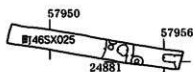
(7) 中世大友府内町跡 第46次調査

当該地に駐車場の建設が計画され、事前の協議を行なったところ、掘削を伴わない盛土による工法であることが確認された。しかし、対象地は推定万寿寺跡の範囲内であり、その全体像を解明する上でも重要な地区である。このため地権者の同意と協力のもと、遺跡の状況把握を目的として確認調査を実施した。調査は、遺跡が破壊されないことが前提にあり、必要最小限に留めて実施している。

調査地は推定万寿寺跡のほぼ中央で、推定南側外郭線のすぐ北側にあたる。周辺調査では第6次調査区の北側、第29次調査区の東側に位置する。調査地は畠として使用され、現地表面の標高は約6.2mである。そこから約0.2～0.4mの耕作土を掘下げると遺構検出面(標高約5.8～6.0m)となる。周辺調査地の検出面の標高は、第6次調査-約5.1m・第29次調査-約5.5mと今次調査地より低くなっている。おそらく現代の土地利用の差(水田と畠)とも考えられるが、今後の検証材料として記しておく。ちなみに推定塔跡の調査を実施した第24次調査では、検出標高約5.9mである。

調査は、調査地の中央より東側に幅約2m・長さ約38mの南北に長いトレンチをあけて行なった。北側では一部東側に拡張し、また、調査地の南西隅についても幅約1m・長さ約9mの東西トレンチをあけて調査を行なった。調査の結果、南北トレンチの中央より南側で道路状遺構[町46SF001]を確認した。土層観察から砂利を多量に含む層を2面確認し、その下層からも砂利・砂を多く含む不定形遺構群を検出した。確実な道路幅は約6～7mを測るが、全体的に砂利を含む層が認められた。この町46SF001は、第29次調査の南側で確認されている道路状遺構の続きと考えられる。第29次調査では、14～15世紀の東西溝跡も3条確認されているが、今次調査では整地層があるためか確認できない。

その他の遺構としては、北側で建物跡[町46SB020]や小区画を示すと考えられる小規模な溝状遺構、礎石と考えられる巨石[町46SX010]、柱穴群などを検出した。町46SB020は、埦や礎を礎石とした建物跡と推測される。柱間は約2.8mと長く、拡張区で検出した柱穴は砂利を多く含み、本来は礎石あるいは埦が置かれていたと考えられる。このすぐ横で検出された町46SX010は、約0.5×0.7mを測る巨石である。礎石と考えられるが、



第12図 第46次調査区遺構配置図 (1/200)

周囲に対となるものがみられず、町46SB020との関連も推測される。また、南北トレンチの北側では一部深掘りを行い下層遺構の確認を行った。結果、西側に掘り込むプランを検出した。東西トレンチでは、西側に掘り込むプラン[町46SX025]を検出している。現状で幅約5mを測り、南北方向の溝状遺構の可能性が考えられる。

今回の調査では、ほとんど掘下げを行っておらず、各遺構の性格や時期は不明なものがほとんどである。しかし、寺の施設と考えられる建物跡の一部が確認されたこと、推定南側外郭線のやや北側で東西道路跡が推定万寿寺跡の中央付近まで延びていることなど重要な所見が得られた。また、出土遺物に瓦片が多くみられることも寺域内であることを裏付けている。

(中西 武尚)



写真35 町46南北トレンチ遺構検出状況（南より）



写真36 町46南北トレンチ遺構検出状況（北より）



写真37 町46SX010検出状況（西より）



写真38 町46SB020検出状況（北より）



写真39 町46SF001土層観察時（東より）



写真40 町46東西トレンチ遺構検出状況（西より）

(8) 中世大友府内町跡 第47次調査

調査に至る経緯

調査地は、中世大友府内町跡における推定称名寺に該当する。以前はガソリンスタンドが所在しており、その後更地となっていた。今回、当該地に店舗が建設される計画が上がり、事前協議の結果、建物基礎が想定される遺構面まで達しないことが判明した。しかし、先述したように対象地は称名寺の範囲内で、未だその規模、構築時期等は不明な状況である。そのため(株)九州フードサービスの協力のもと、その解明にあたるべく確認調査を実施した。調査は、遺跡が破壊されないことが判明していることから遺構の掘り下げは必要最小限度に留めている(トレンチ配置から1～3区と設定している)。

遺跡の概要

第47次調査区は、推定称名寺のほぼ中央部に位置している。南に約50m離れた地点は第11次調査区(県教委)あたり、16世紀後半の道路状遺構や土器状遺構が検出され、また井戸跡などの生活関連遺構も発見されている。遺構は客土の下位で確認される耕作土層(2層あり近世～現代のものとして位置付けられる)を除去した後に現れる茶褐色土を基盤として検出されている。調査区の南側(1区)では低湿地と思われる粘質土プランも認められ、全体的に土壌は水分が多く、湿度が高い状況であった。

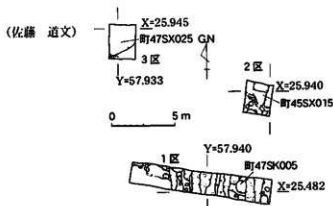
検出した遺構は、中世後半のものとしては廃棄遺構(町47SX015)・土坑(町47SK005)・井戸跡と思われる大型遺構(町47SX025)などが挙げられる。近世段階の耕作に関連する遺構(溝状遺構：南北方向)はこれらを掘り込んでいることから、遺跡はその後、耕地化したと考えられる。町47SK005(1区)は径50cm程の廃棄土坑である。出土物には在地のクロロ目土師器杯、瓦質火鉢、埴、鉄釘などがある。15世紀後半～16世紀前半に位置付けられるが、火鉢の特徴から時期は新しくなる可能性もある^(注1)。町47SX015(2区)は在地系土師器(ハコ形)を大量に含む廃棄遺構である。定存するものも多数出土している。近年、館内外を問わず同様の土師器出土例が増加している。共存する土器から従来の時期と齟齬が現れてきていることから、その編年作業が急務の課題である。現状では14世紀後半～15世紀前半とされる。町47SX025は上位に堆積する埋土から瓦破片(焼成不良、二次被熱含む)、銅型?などが出土しており、16世紀後半には埋没していると考えられる。

小結

今回の調査からは、寺の構造を示すような遺構はみつかっていない。しかし、称名寺は16世紀初頭に建てられているとされるため、町47SK005が確認されたことは本調査区が寺域内であることを裏付けるものといえよう。また、それ以前の段階も、この地は土師器が大量廃棄される場であり、町屋の状況とは様相が異なる。16世紀後半に機能していた遺構は検出されておらず、現状では当該期は空閑地と考えられる。このエリアの調査は、周辺と比べ情報量が少ないことから、今後、調査事例の増加することで、より具体像が描かれると思われる。

(注)

(注1) 大分県文化課 吉田氏より御教示



第13図 遺構配置図 (1/300)



写真41 町47調査区全景（1区）



写真43 町47SK005遺物出土状況



写真44 町47SK005遺物出土状況



写真42 町47調査区近景



写真45 町47SX015遺物出土状況詳細1



写真46 町47SX015遺物出土状況詳細2

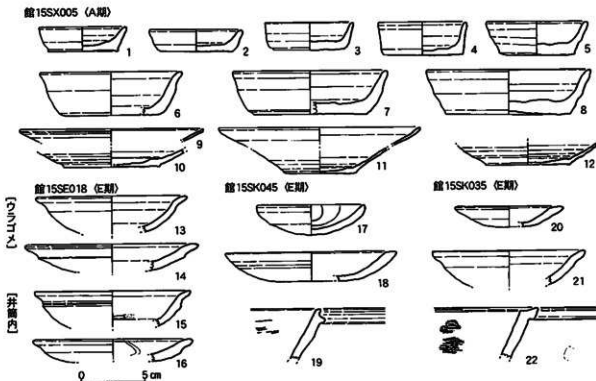
(9) 中世大友府内町跡 第33-2次調査

第33-2次調査区は平成15年度に実施した第33次調査と同一地点である。前回、開発計画が持ち上がったが、その確認調査の内容から計画の見直しが行われた。今年度、再度個人住宅建築の申請が行われ、数回にわたる設計会社との協議の結果、基本的に遺跡の大部分を盛土保存することで合意が得られた。しかし、建物の構造上、基礎杭が入る一部については遺跡が破壊されることから、確認調査を実施することが必要となった。基礎杭は部分的であり、消滅する遺構は小面積であるが、地権者の協力のもと調査は面的に広範囲に行うことができた。調査は平成17年2月14日から開始し、現段階(3月)でも継続中である。

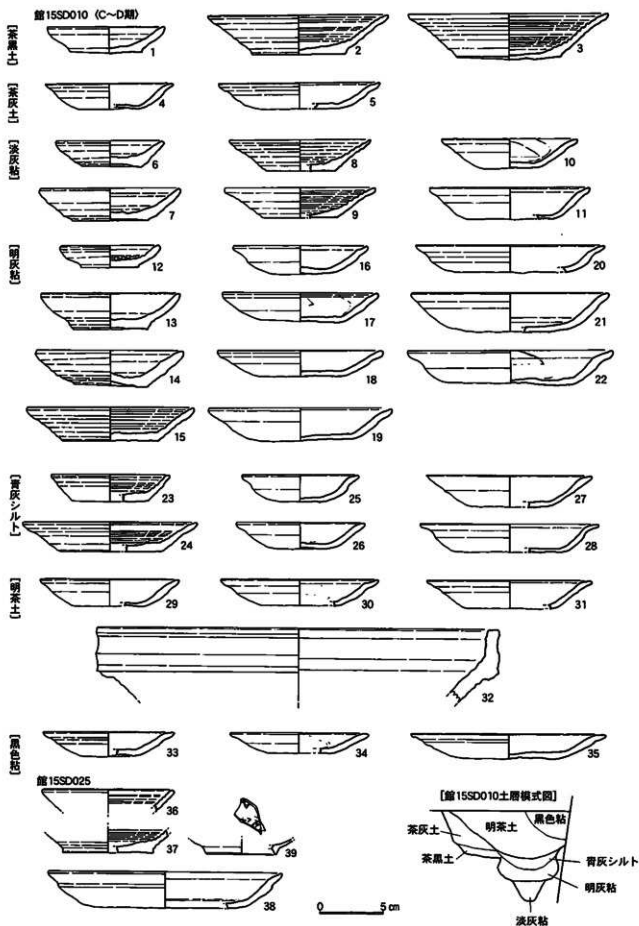
前回は調査区を東西方向に縦断する溝状遺構[町33SD010]・櫛跡などが検出されている。だが、その時期等については不明な点が多く、今回の調査はその解明を目的として行っている。現時点では、溝状遺構は底面から在地系土層(いわゆるハコ形を呈す)が出土していることから15世紀段階に埋没が開始していると考えられる。調査区西端では南北の溝状遺構がみつまっている。その位置関係から万寿寺の塔につながる道路跡に付随する側溝の可能性があり、出土遺物から15世紀後半～16世紀前半には埋没していると推測される。その他、同時期のものと思われる(埴土及び遺物から16世紀代か?)複数の柱穴列が確認されている。詳細は整理後としたいが、発見された遺構から、本調査区は「府内古図」に描かれた町の南限を示す場であったことが想定される。

(10) 中世大友府内町跡 第50次調査

第50次調査区は、中世大友府内町の推定ノコギリ町の境界部分にあたり、区画施設等が発見されることを想定していた。開発原因は個人住宅の浄化槽設置に伴うもので、調査面積は非常に狭小となっている。調査は平成17年2月8日に実施した。確認された遺構には道路跡と思われる硬化面(砂質土)が挙げられる。出土遺物がないため時期は不明であるが、16世紀末段階のピットがこの層を掘り込み、下位に堆積する土層からは14世紀後半に比定される常滑焼破片が出土していることから、この範囲で捉えられる。また、隣接する水田に使用される水路と同一軸を有する溝状遺構を検出しており、現在の水路及び畦道が中世段階の町割を踏襲しているものと推測される。尚、中世大友府内町跡第33-2・50次調査の詳細については、来年度報告予定である。(佐藤 道文)



第14図 大友氏館跡第15次調査出土遺物実測図① (1/3)

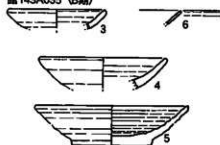


第15圖 大友氏館跡第15次調査出土遺物実測図② (1/3)

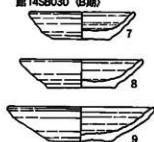
館14SB040 (B期)



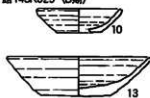
館14SA035 (B期)



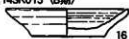
館14SB030 (B期)



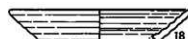
館14SK025 (B期)



館14SK015 (B期)



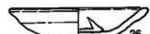
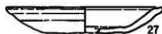
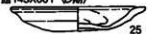
館14SK020 (C期)



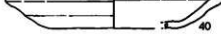
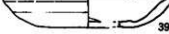
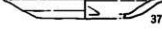
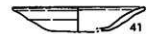
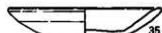
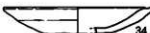
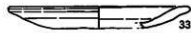
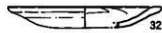
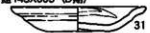
館14SK020



館14SX001 (D期)



館14SX005 (D期)



0 5 cm

第16圖 大友氏館跡第14次調査出土遺物実測図 (1/3)

第3章 まとめ

(1) 大友氏館跡北東部地区の遺構変遷と出土土師器

平成15・16年度における大友氏館跡確認調査の概要報告を終えるにあたり、大友氏館跡北東部地区について、第14・15次調査地区出土土師器のおおまかな分類および時期比定をおこない、これに基づく遺構変遷を試みまとめにかえたい。

<出土土師器の様相>

大友氏館跡内における出土遺物の大半は土師器であり、今年度調査を行った第14・15次調査では、各遺構から比較的まとまった良好な資料が出土している。さらに館15SD010では、各堆積層別に遺物の取り上げをおこなっており、これら出土した土師器についてその様相から大きくA～E期の5期に分けることができた。以下、その特徴について記す。

[A期]—館15SX005(第14図)・館16SX002(第7図)

在地系のハコ形を呈する土師器が主体となり、これに白色系土師器が伴う段階。

ハコ形を呈する土師器は、口径と底径の差が小さく、中世前期からの系譜で考えられるロクロ成形による在地系土師器であり、そのプロポーションから通称「ハコ形」と仮称されているものである(以下「ハコ形土師器」^(a1)と呼称)。このハコ形土師器には、小皿・小杯・坏といった器種がみられる。小皿は、口径が約6～8cmで、やや器高が高くなる[第14図1～3]。この小皿の器高がさらに高く、法量が大きくなったものが小杯であり、この段階に一定量出土してくる[第14図4・5]。坏は、底部から口縁部に直立気味に立ち上がるものと、底部からやや開き気味に立ち上がるものの大きく2タイプがある。前者は、体部下半にケズリ風のナデ調整がなされ、体部に稜線がみられるもので、色調は橙褐色系を呈す[第14図6～8]。後者は、口径と器高の比率でいくつかのバリエーションが認められるが、器高が低く、口縁部でやや外反するもの[第7図4・5]は、胎土にウンモ片を多量に含んでおり、色調も橙白～明褐色系を呈す独特のものである。白色系土師器は、その名の通り白色を呈し、器壁が極めて薄いものである。器形は口径と底径の差の比率が大きく「逆ハの字」形を呈す。この種の土師器は、大内氏館跡出土の土師器の一群に類似することから「大内系土師器」と仮称されていたものである。しかし、大内氏館跡内で通有に出土しているものの、その生産地については未だ不明なところが多く、「大内系」とするには誤解を生じる恐れがある。このことからこの土師器の特徴を最もよく表している名称として「白色系土師器」と呼称する。^(a2) A期の白色系土師器は、器高が高く、口縁部が内湾する特徴をもち、丁寧なナデ調整がなされている[第7図7/第14図9～12]。^(a3)

[B期]—館14SB040・030/SA035/SK025(第16図1～15)

在地系の逆ハの字形を呈する土師器が主体となり、これに白色系土師器が伴う段階。

逆ハの字形を呈する土師器^(a4)は、口径と底径の差が大きく、内面の調整に工具等を用いることで、そのロクロ目が沈線状(段々状)に残る在地系土師器であり、この内面調整の特徴から通称「段々土師器」あるいは「ロクロ目土師器」と仮称していたものである(以下「ロクロ目土師器」^(a5)と呼称)。

B期に出現してくるロクロ目土師器には、小皿・坏がある。いずれも底部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がる特徴をもつ。底部の処理は全て回転糸切り離しであるが、底部と体部の境に段をもつものと、もたないものがある。色調は小皿・坏ともに、橙褐色～赤褐色系を呈す。内外面の調整では、ある程度ロクロ目をナデ消しており、緩やかなくぼみ状になっている。中には、完全にナデ消しているものも認められる。B期に示した資料は、建物群の柱穴から出土したものを中心としており、その変遷から館14SB040→SA035→SB030→SK025への変化の方向が読み取れる。古いものは器高が高く、新しくなるにつれて器高が低くなっていくことがわかる。

[C期]—館14SK015・025(第16図16～24)/館15SD010(第15図1～32)

薄手の京都系土師器が主体となり、これにロクロ目土師器が伴う段階。

ロクロ目土師器では、2タイプの小皿・杯がある⁴⁴⁾。杯は、底部から口縁部にかけて開きながら立ち上がり、口縁部は直口のもので外反するものがみられる。器高もさらに低くなり、皿形化の傾向にある。内面の調整では、深い沈線状のロクロ目が顕著にみられ、外面は丁寧なナデ調整がなされている。小皿も同様の形態を呈しているが、前段階の口縁部が内湾するものがやや残る。この他にプロローションは同じであるが、器壁が厚く、重量感のある小皿・杯の一群がある。内面の調整には工具を用いず、顕著なロクロ目はみられない。

京都系土師器は出現期の一群である。器壁は極めて薄く、器高が高い。口縁部は細く外反するものが目立ち、体部から口縁部の境付近に一番の厚みをもつ。色調は白色系に近い。⁴⁵⁾

館15SD010では、溝の掘削→掘り返し→埋め戻し→別道構の掘削といった一連の堆積層別に出土土師器を羅列しているが、これより各土師器とも皿形化への傾向が読み取れる。

[D期]—館14SX001・005(第16図25～44)/館15SD010黒色粘(第15図33～35)

薄手と厚手の京都系土師器が混在する段階。

体部から口縁部が紡錘状になるものと、ほぼ同じ厚みで口縁端部に平坦面をもつものがある。厚手の京都系土師器といってもC期に比べて厚く、5mmを超えないものがほとんどであり、色調も橙白色系で胎土も精製されている。図示した資料は、器高の高いもの、低いものが混在しているが、古い時期のものが混入している可能性が高い。

[E期]—館15SE018/SK045・035(第14図13～22)

厚手の京都系土師器が主体で、杯形態のものが出現する段階。

口縁部外面に強い横ナデをもつものと、もたないものがある。色調は褐色を呈し、胎土はやや粗いものが目立つ。前段階までの京都系土師器とは明らかに異なっている。また、京都系土師器以外に土師質鍋などの生活雑器類がみられるようになる。

<時期比定>

以上がA～E期の概要である。各期の特徴をまとめると、A期—白色系土師器の出現、B期—ロクロ目土師器の出現、C期—京都系土師器の出現、D期—京都系土師器の皿形化、E期—京都系土師器杯の出現、となる。

各共伴している各期の陶磁器などから年代をみていくと、A期の白色系土師器は、大内氏遺跡の土師器編年に照らし合わせると、器高が高く、口縁部が内湾する特徴から大内Ⅰ～Ⅱ期(15世紀前半～後半)に比定される。館15SX005と館16SX002の間には、若干の時期差があると考えられるが、館16SX002に近い時期のものとして館15SX008の資料があげられる。これは出土した白色系土師器から大内Ⅱ期(15世紀後半)に位置付けられている資料であり、館16SX002に比べるとハコ形土師器小杯の器高が高く、館16SX002に後出する一群と考えられる。このことからA期は、15世紀前半～中葉に位置付けておく。

C期の京都系土師器の出現については、「式三献」に代表される武家儀礼の導入時期である天文6年(1537)とする論考(塩地1998・小野2001)がすでにあり、また、C期には乗岡編年中世6b期に比定されている備前焼播鉢がみられることから16世紀前半～中葉に位置付けられる。

D期からは乗岡編年近世1b期に比定されている備前焼播鉢がみられ、16世紀後半に位置付けられる。E期からは漳州窯系青花皿や小野分頼染付碗・皿E群が出土しており、16世紀後半～末葉に位置付けられる。B期については、A期とC期の間に収まることから15世紀後半～16世紀前半に位置付けられよう。

<遺構変遷>

【A期】 【15世紀前葉～中葉】

現状、遺構群としてのまとまりは認められないが、各調査地点において一定量の遺物が出土している。

第13次調査で館13SX050・045の大形掘り込み遺構が確認されている。

その他、館14SX045・館15SX005などの整地層、あるいは土坑状の遺構が確認されている。

※第16次調査で確認されている土師器集中遺構もこの時期の一括資料となる。

【B期】 【15世紀後葉～16世紀前葉】

第6次調査において盛土整地による基壇状の高まりが存在する。その北側の第14次調査においては、掘立柱建物跡[館14SB030・040]や欄跡[館14SA035]が確認されている。

第13次調査においては、南北方向の溝状遺構が確認される。上面にはロクロ目土師器の大量廃棄が認められるが、それより下部の埋め土は、細かいブロック土を多く含み、しまっていることから築地などの基底部の可能性も指摘されている。[館13SK010・025・040]

また、第15次調査においても、溝跡[館15SD010]がこの段階に構築されており、盛土整地とその北側の建物群を区画するような溝状遺構が東側において2条確認されている。

【C期】 【16世紀前葉～中葉】

第15次調査において、溝状遺構[館15SD010]に水が溜っている段階。第4次調査においても南北方向の溝状遺構[館4SD003]が確認されており、第6次調査の盛土整地を中心に両側に東西約60mの区画が想定される。

【D期】 【16世紀中葉～後葉】

この段階に第6次調査の盛土整地上に大形建物関連遺構が構築される。

第15次調査では、東側の溝状遺構[館15SD010]が一気に埋め戻され、これは館の方二町拡張段階の整地事業に伴うものと考えられる。その後、新たに西側に溝状遺構[館15SD025]がつくられ、第4次調査においても、西側に溝状遺構[館4SD006]が掘り直されている。

第14・10次調査では、土師器の大量廃棄がおこなわれる。その南側には、大形の掘り込み遺構[館14SX005]がある。また、第10次調査で確認されている整地層もこの館拡張に伴うものと考えられる。

第13次調査においても当該期の遺構が部分的に確認されているが、詳細は不明である。

【E期】 【16世紀後葉～末葉】

島津氏の府内侵攻以後の遺構群と位置付けられる。

第13次調査では、鍛冶関連と考えられる遺構群や廃棄土坑が確認されており、第15次調査では、井戸跡[館15SE018]や土坑群[館15SK035・045]など生活具のする遺構群が確認できる。おそらくこの段階に町屋域が館の内部にまで進出してきたと考えられる。

<まとめ>

今回、館内出土の土師器を時期別に概観したが、各土師器の変遷における大きな変化として器高の縮小化―皿形化への方向が見出せた。A期のハコ形土師器については、まだまだ不明な点が多いが、ロクロ目土師器については、従来の編年に一致している。しかしながら、京都系土師器の変遷においては、これまで器高の伸張化が大きな変化の属性として捉えられてきたが、館内では逆の変化が抽出された。これは、これまで編年指標とされて

きた京都系土師器が、大友領国内の資料を基準としたこと起因していると考えられ、館内と館以外での使用されいる京都系土師器の形態変化の違いを指摘できる。

北東地区の遺構変遷においては、推定中心施設の盛土整地がなされる段階〔B期〕において、その東側に区画を示すような溝状遺構〔館15SD010〕や北側に建物群が検出されたことは、大友氏館跡の形成過程を知る上で重要な所見といえる。また、その後のC・D期において、東西幅約60mの間隔で盛土整地を中心として両側に南北に延びる溝状遺構〔館4SD003・館15SD010/館4SD006・館15SD025〕の所見についても、大友氏館跡の形成過程考えるにあたり重要な遺構になるものと考えられる。E期における嚴治関連遺構〔館13〕や井戸跡〔館15SE018〕・土坑〔館15SK035-045〕などの遺構群は、第12次調査所見と同様に、館内における土地利用の変化を示すものと考えられる。

以上、今年度調査を実施した、第14次・15次調査の所見を中心に館北東部地区の状況についてみてきたが、概報という性格上、すべての出土遺物を網羅しているわけではなく、今後、各調査地点で確認している遺構・遺物について、再度総括した検証が必要と思われる。

(中西 武尚)

〔注〕

- 〔注1〕 今回、土師器を分類するにあたり、あえて記号化せず、その土師器の特徴をもっとよく表す名称として、「中世大友城下町跡」における発掘調査の中で従来から便宜的に仮称されているものをそのまま使用している。
- 〔注2〕 吉賀信幸氏（山口市教育委員会）からのご教示を受け、名称については、中世大友城下町跡発掘調査指導委員会の調査会議の中で「白色系土師器」を用いることで共通理解を得たところである。
- 〔注3〕 A期に関しては、第16次調査地点において良好な一括資料が出土しており、現時点では確認されていない土師器の線相が明らかになると考えられる。
- 〔注4〕 逆ハの字形を呈する土師器としては、白色系土師器も含まれるが、異なる属性が多く別タイプに分類しておく。しかしながら、在地系土師器の「ハ」字形から「逆ハ」の字形への変遷過程においては、かなりの比重で影響を与えているものと考えられる。
- 〔注5〕 この名称は、在地系の逆ハの字形を呈する土師器の総称として用い、この中にはロクロ目が丁寧にナデ消されているものも含む。
- 〔注6〕 この他、耳皿が加わる。
- 〔注7〕 町屋城である中世大友府内町跡の調査においては、京都系土師器の胎土であるが、ロクロ成形された折衷形と考えられる土師器も出土している。〔第8図〕参照。

参考文献

- 大分市教育委員会 2004 『大分市市内道跡確認調査概報』～2003年度～
- 大分市教育委員会 2003 『大分市市内道跡確認調査概報』～2002年度～
- 大分市教育委員会 2002 『大分市市内道跡確認調査概報』～2001年度～
- 大分市教育委員会 2001 『大友館跡-発掘調査概報Ⅱ-』
- 大分市教育委員会 2000 『大友館跡-発掘調査概報Ⅰ-』
- 大分市教育委員会 1999 『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.10
- 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001 『南東部市・豊後府内』都市と交易
- 森田 勉 1982 『14～16世紀の白磁の型式分類と編年』『貿易陶磁研究』2
- 小野正敏 1982 『15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代』『貿易陶磁研究』2
- 泉岡 実 2000 『備前焼跡の編年について』『第3回中近世備前焼研究会資料』
- 山口市教育委員会 1991 『大内氏館跡-大内氏関連遺跡道跡Ⅰ』
- 坪根伸也・塩地潤一 2001 『豊後国の土器編年』大分・大友土器研究会論集 大分・大友土器研究会
- 塩地潤一 1998 『大友領内における京都系土師器の分布とその背景』『博多研究会』第6号 博多研究会
- 塩地潤一 1999 『九州出土の京都系土師器Ⅱ』『中近世土器の基礎研究』XIV 日本中世土器研究会
- 小野貴史 2001 『大友氏における「式三献」について』大分・大友土器研究会論集 大分・大友土器研究会

(2) 推定第四南北街路沿いの状況 (中世大友府内町跡第26・32・44・45次調査より)

平成15年より市道拡幅事業により、大分市顕徳町2・3丁目から六坊北町にかけて発掘調査を行っている。この道路拡幅地点は「府内復原想定図」によると推定第四南北街路跡、上町・中町・下町などの町屋部分及びダイウス堂やコレジオなどのキリシタン関連施設や寺院跡に内漏するエリアに該当する。これまでの調査成果によると15世紀～16世紀末にかけての遺構が確認されている。現在も調査が継続中であることから全容把握にはいたっていないが、現段階の成果をそれぞれを3地点に分けて簡単に説明したい。(第1図参照)

<上町・祐向寺エリア 町25次調査>

検出された遺構には、掘立柱建物跡・柱穴列(群)・溝状遺構・道路跡及び道路側溝(南北方向)などが挙げられる。建物及び溝状遺構に関しては現在の道路方向に直交する状況が看取される。遺構の時期について建物跡、柱穴群は15世紀代、16世紀後半～末段階に比定される。道路跡に伴うと思われる溝状遺構は、出土遺物から16世紀末～17世紀初頭以降のものと推測され、大友氏除国後の再整備の際に構築されたと考えられる。大友氏段階の道路跡は確認されておらず、みつかった建物跡は現在の道路下に展開することから、その位置的関係に今後の課題を残す。

<キリシタン関連施設周辺 町26・32・45次調査>

キリシタン施設周辺推定地に該当することから調査に期待がもたれたが、明確な遺構を確認するにはいたっていない。検出された遺構は15世紀後半～16世紀前半、16世紀後半～末段階の2時期に大別される。15世紀代は現在の道路沿いに井戸跡(26・32次)、柱穴群が構築されている。第32次調査の所見から調査区より西側は空地が存在していることが指摘されている。また、井戸跡はすべて現在の道路沿いで検出されていることから、当該期の生活空間は現在の道路から東側に展開していることが想定される。第26次調査でみつかった土器埋設遺構は、在地系クロロ目土器器坏31点を重ねた状態で置いたもので、法量は2つに分かれる。これらの資料は第32次調査の井戸跡に後出すると考えられる。第45次調査区の中央から南側にかけて多数のビッド群がみついている。配置状況から、比較的整然とした建物群を構成すると思われる。先述した井戸跡が埋没した後、町屋とは別の様相をもった(=武家地?)生活空間が西側に広がっている可能性がある。16世紀後半以降に該当する遺構は、溝状遺構(26・32次)、大型建造物柱穴遺構(26次)、井戸跡(26・45次)、埋設遺構(45次)、整地層(32・45次)などが挙げられる。第26次調査で検出される大型柱穴遺構は、ほぼ等間隔(=約7m)に南北方向に3基が配列され、現状では東西への展開状況は不明である。柱掘り方は1m以上を呈し、柱痕跡から20～30cmの径をもつ柱があったことが想定される。この遺構がキリシタン施設の一部になるか否かは現段階では不明である。第45次調査地点は、この時期、柱穴も少数ではあるが確認されるが、主に井戸が造られるようになる(2～3基存在)。調査区の中央から北側は主に砂層が堆積する地盤、中央から南側には安定した土壌が広がり、このような立地条件も「場」の利用状況に影響したと思われる。また、埋設遺構も3基検出され、その中で東側に配置されるものは、胴部下位～底部にかけて埋置された状態でみづから良好な保存状況を示す。この埋設内部から華南三彩の魚形水注の破片が出土している。出土遺物、層序関係から16世紀末～17世紀初頭段階に廃棄されたと思われる。

<中町、御北町、御西町周辺(館西側)の状況 町27・44次調査>

第27次調査では、現道より東側で16世紀段階の道路跡がみついている。道路は、粘質土・砂利・砂・砂質土を薄く版築状に積み重ねて硬く叩き締めて構築している。全体規模は不明であるが、現状では幅員5m以上あるものと推測される。道路跡下位では柱穴跡が複数存在しており、以前は生活空間であったことが窺える。推定第二南北街路沿いの調査所見より、中世府内町は16世紀中頃に大規模な整備が行われていることが判明している。

大分市 市内遺跡確認調査概報

—2004年度—

平成17年3月31日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2番31号

印刷 (有) 中央印刷
大分市顯徳町2丁目2-38